

科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム
プログラムアドバイザー・アンケート結果（2020年度）

プログラム中間評価用資料

RISTEX

2020年11月13日

目次

アンケート概要	1
アンケート結果	2
項目 1. プログラムを取り巻く外部環境	2
Q1_1【外部環境の変化と対応の有無】 SA	2
Q1_2【外部環境の変化の内容】 OA ※前問回答が 1 か 2 の方が回答 (n=7)	2
項目 2. 募集・選考	4
Q2_1【潜在的な提案者へのアプローチ】 SA	4
Q2_2【潜在的な提案者にアプローチする取組】 MA (n=7)	4
Q2_3【募集・選考過程における提案を育む取組】 SA	4
Q2_4【提案を育む効果的な取組】 MA (n=7)	5
Q2_5【募集・選考段階でのプログラム活動の影響】 OA	5
項目 3. ハンズオンマネジメント	7
Q3_1【プロジェクトとのコミュニケーション】 SA ※担当プロジェクトを中心に回答	7
Q3_2【効果的なコミュニケーション手段】 MA ※担当プロジェクトを中心に回答 (n=7)	7
Q3_3【ハンズオンマネジメントの効果】 OA	7
Q3_4【プロジェクト間連携の推進】 SA	8
Q3_5【プロジェクト間連携に影響を与えた活動】 MA ※前問回答が 1 か 2 の方が回答 (n=5)	9
Q3_6【実装に向けた取組への支援】 OA	9
項目 4. マネジメントグループ内でのコミュニケーション	10
Q4_1【マネジメント内のコミュニケーション】 SA	10
Q4_2【効果的なコミュニケーション手段】 MA ※前問回答が 1 か 2 の方が回答 (n=6)	10
Q4_3【マネジメント内コミュニケーションの影響】 OA	11
項目 5. 成果の創出、目標達成	12
Q5_1【成果創出・目標達成の見込み】 SA	12
Q5_2【プログラムのアウトカム】 OA	12
Q5_3【インパクトの見込み】 OA	13
Q5_4【課題の克服と成否要因】 OA	13
Q5_5【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】 SA	14
Q5_6【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】 SA	15
Q5_7【SciREX 事業に貢献した活動】 MA (n=7)	15
Q5_8【自身や周りの変化】 MA (n=7)	16
項目 6. プログラムの効果	17
Q6_1【本プログラムならではの効果】 MA (n=7)	17
Q6_2【本プログラムの固有効果の内容】 OA	18
項目 7. ご意見・提案	19
Q7_1【制度についての改善提案】【アドバイザー制度の改善点・提案】 OA	19
Q7_2【ご意見・提案】 OA	20

アンケート概要

本アンケートは、プログラムの中間評価に向けてプログラムが「活動報告書」を作成するための参考資料として、また、評価委員が評価を行う際の参考資料とするため、プログラムのステークホルダー（プログラムアドバイザーおよびプロジェクト実施者）からの情報を収集する目的で実施した。

本報告書は、プログラムアドバイザーに対するアンケートの結果である。

◇ 目的

プログラム全体の運営状況などを把握するために実施。アンケート結果は、RISTEX におけるプログラム中間評価及び、SciREX の中間評価において利用する。

◇ 実施主体

RISTEX ※プログラム担当並びに運営評価委員会担当が協力して実施した。

◇ 対象者

「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」プログラムアドバイザー 7名

※Policy Door（プログラムの広報誌）専門のアドバイザー、1年未満のアドバイザーを除外した。

◇ 有効回収

7票（100%）

◇ 実施時期

2020年10月（22日（木）ㄨ切） ※11月13日まで延長

◇ 質問項目

28問（単一選択 9、複数選択 8、自由記述 11）

◇ 方法

アンケート用紙をメールに添付して依頼、回収

◇ アンケート情報の利用目的（依頼文の記載）

ご回答いただいたアンケートは、別途実施するプロジェクト関係者へのアンケートの回答とともに、プログラム総括及び運営評価委員会ならびに SciREX 事務局に提示し、「プログラムの中間評価」「SciREX の中間評価」のための資料として活用いたします。また、プログラム運営の改善のために使用することがありますが、それ以外の目的での利用は行いません。

◇ 個人情報の扱い（依頼文の記載）

アンケートへのご回答は、個人が特定できない情報として取りまとめて利用いたします。また、中間評価の終了後には、評価報告書等とともに RISTEX の WEB サイトで公開する予定ですが、プライバシーにかかわる情報が公開されることはありません。

アンケート結果

項目 1. プログラムを取り巻く外部環境

Q1_1【外部環境の変化と対応の有無】 SA

プログラムがはじまった当時（平成 23 年度）と比較し、プログラムを取り巻く問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。また、変化に対しプログラムとして適切に対応できていると思いますか。該当するものを 1 つお選びください。

Q1_1【外部環境の変化と対応の有無】(SA)	人
①変化はあったが、適切に対応できている	3
②変化はあったが、十分に対応できていない	4
③対応が必要なほど大きな変化はなかった	0
総計	7

Q1_2【外部環境の変化の内容】 OA ※前問回答が 1 か 2 の方が回答 (n=7)

問題状況や社会情勢にどのような変化があったのか具体的にご記入ください。また、適切に対応できている、もしくは十分に対応できていないと考える理由についても合わせてご記入ください。

ビッグデータや LoT が普及し、Society 5.0 が政策になる変化があった。 ビッグデータ関連の研究を重点項目にするなど、対応できていると考える。
医療機関のレジリエンス性を調査するために、想定外で起こった大地震発生時に、(計画にはなかったが) 的確に現地調査を行い貴重なデータを得ることができました。災害ではあったが良いタイミングでの判断だったと評価しています。 (この質問の趣旨とは違うかもしれませんが) 今回のコロナ禍により、計画していたインタビューや意見交換ができなかったり、研究現場への入場が制限されたことなどの状況変化を受けて、実施計画を適切に見直したことは評価したい。
プログラムを取り巻く問題状況としては、“EBPM”ということがますます強く言われるようになった一方で、必ずしも「科学技術・イノベーション政策のための科学」を推進すべきであるということが、国内外では強調されては言われなくなった。たとえば、本プログラム開始前や開始当初は、U.S.において NSFにより実施されていた Science of Science and Innovation Policy (SciSIP)プログラムへの参照等が見られたが、現在、U.S.で実施されているような Science of Science: Discovery, Communication, and Impact (SoS:DCI)や Science of Science Policy Approach to Analyzing and Innovating the Biomedical Research Enterprise (SCISIPBIO)との対照について、ほとんど意識されることがなくなった。
社会の変化、たとえば、情報化・デジタル化などのスピードに、十分についていけない。また、問題が顕在化してから取り掛かったのでは、遅いことも多い。 常に潜在的な課題を掘り起こし、先取りしていく方策が求められる。

東日本大震災、福島原発事故で科学技術に対する信頼が喪失した。その結果、研究開発への国民からの期待も薄れ、国立大学運営費交付金の削減が常態化しても国民からの抗議の声も出てこない。国際面では中国の研究開発力が急速に上昇し、論文数などでは中国の方が日本をはるかに上回る状況となってきた。大学のランキングをみても日本は東大をはじめ順位が下降している。これに対して本プログラムは、センター長の考え方、重点として考えるべきことは何かを募集要項で公募時にわかりやすく説明している。

大学の予算が削減され、特に社会科学系研究者の研究環境が厳しくなっている。ネット、SNSが普及し、エビデンスに基づく情報かどうかの区別が難しくなった。一方、情報収集、コミュニケーション手段が大きく変わり、また領域の考え方も変わってきたが、日本の学術研究そのものがこれについて行けていない。

変化：EBPM に対する社会ニーズのさらなる高まり。

理由：ニーズの高まりに対応した活動の高まりがみられない。

項目 2. 募集・選考

Q2_1【潜在的な提案者へのアプローチ】 SA

プログラムの成果創出に貢献しうる潜在的な提案者に対し、プログラムとして十分にアプローチできたと思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q2_1【潜在的な提案者へのアプローチ】 (SA)	人
①アプローチできている	0
②それなりにアプローチできている	4
③あまりアプローチできていない	3
④アプローチできていない	0
総計	7

Q2_2【潜在的な提案者にアプローチする取組】 MA (n=7)

潜在的な提案者へのアプローチに効果的だと思う取組を、次の中から3つ以内でお選びください。

Q2_2【潜在的な提案者にアプローチする取組】 (3MA)	人
Q2_2_①募集要項の作りこみ	2
Q2_2_②募集説明会	3
Q2_2_③RISTEX 主催セミナー・シンポジウム	4
Q2_2_④SciREX 主催セミナー・シンポジウム	2
Q2_2_⑤プログラム WEB	1
Q2_2_⑥POLICYDOOR (Web または冊子)	4
Q2_2_⑦RISTEX のパンフレット	0
Q2_2_⑧プログラムマネジメントや RISTEX 関係者による口コミ	1
Q2_2_⑨その他 (具体記入無し)	1

Q2_3【募集・選考過程における提案を育む取組】 SA

募集・選考過程や採択決定直後の段階において、プログラムとして、提案を「育む」取組は十分にできていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

提案を「育む」とは、提案された内容とプログラムの問題意識およびコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けた協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化、改善等に取り組むことです。

Q2_3【募集・選考過程における提案を育む取組】 (SA)	人
①できている	1
②それなりにできている	6
③あまりできていない	0
④できていない	0
総計	7

Q2_4【提案を育む効果的な取組】MA (n=7)

提案を「育む」のに効果的だと思う取組を、次の中から3つ以内でお選びください。

Q2_4【提案を育む効果的な取組】(3MA)	人
Q2_4_①募集要項の作りこみ	1
Q2_4_②募集説明会	1
Q2_4_③プロジェクトによる提案書に対するコメント	6
Q2_4_④総括面談	5
Q2_4_⑤プログラムサロン (ミニ合宿)	0
Q2_4_⑥SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREX セミナー・オープンフォーラム等)	0
Q2_4_⑦担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	4
Q2_4_⑧RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	1
Q2_4_⑨プロジェクト間連携の促進のための場作り	0
Q2_4_⑩POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	0
Q2_4_⑪プログラムによる情報発信 (POLICYDOOR、プログラム WEB 等)	1
Q2_4_⑫その他	2
・採択時における「若手」の考慮	1
・面接審査における質疑応答	1

Q2_5【募集・選考段階でのプログラム活動の影響】OA

募集・選考段階や採択決定直後におけるプログラム活動によって、提案者にどのような影響や効果があったのか、良い影響だけでなく、もし悪い影響もあればそれも含めて、できるだけ具体的にご記入ください。

科学イノベーション政策のための研究であることの理解が進み、研究目的や内容が良い方向に変更された。
前年度不採択であった提案が、翌年度、指摘点を再度考慮して再提案する案件があった。ただし、過剰に反応した提案もありました。
公募のプロジェクトは普通は千差万別な内容の提案が出されるが、本プログラムでは募集段階でプログラムの目的を明らかにしているため、それなりに政策立案と関係のある提案が出されている。選考直後の総括面談により、研究の方向性を議論することは3年間の活動の冒頭の意識合わせとして極めて重要である。
採択時の総括面談は、書類選考や面接だけでは十分でなかった点、あいまいだった点などについて再度確認する上で、大変重要な役割があると感じる。この段階で理解が得られないプロジェクトは、その後も何等かの問題を抱え続け、期待された成果に結びつかなかったものがあったように思う。採用時にしっかり整理することの重要性を痛感する。

提案者の中には、科学研究費助成事業のように「助成金」として研究費を獲得すれば後は自由に研究を展開できると考えていたり、RISTEX で実施している他のプログラムと同様な内容であると考えていたりする者があるように窺われるが、選考時における書面審査におけるコメント及び面接審査における質疑応答を通じて理解してもらおうとともに、採択決定直後等における総括面談においてもその理解を深めてもらい、少なくともほとんどの研究代表者については、概ねプログラムの目的が共有・認識されて実施されているように窺われる。他方、共同研究者については、とりわけ総括面談等に加わっていない場合には、各プロジェクト内での運営にも依拠することから、必ずしもプログラムの目的が共有・認識されては研究が実施されていないことも少なからずあるように窺われる。

提案者にプログラムの説明、こちらの考え方を伝え、意見を交わす機会があるのは良いこと。また研究方法、アプローチに対してもコメントをしているが、この辺りはもっとアドバイスを増やしても良いかもしれない。また SCIREX や他の RISTEX の研究者や研究内容とのブリッジをもっとしてあげれば良い。

(蛇足)

NISTEP の中期計画の委員をしている。ここでも RISTEX や SCIREX の研究内容をもっと NISTEP がフォローし、彼らが独自に調査研究するだけでなく、前者の研究内容、研究者ネットワークをもっと活用し、NISTEP の活動に反映させるべきというアドバイスを行なっている（多分、中期計画に盛り込まれるはず）

4（総括面談）や 7（担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション）によって、選考段階で指摘された問題点の共有と提案者によるそれへの対応

項目 3. ハンズオンマネジメント

Q3_1【プロジェクトとのコミュニケーション】SA ※担当プロジェクトを中心に回答

RISTEX では、プログラムの成果創出と目標達成に向けて、採択後もプロジェクトに対して関与する「ハンズオンマネジメント」を行っていますが、プロジェクトとのコミュニケーションは十分にとれていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q3_1【プロジェクトとのコミュニケーション】(SA)	人
①コミュニケーションがとれている	0
②それなりにコミュニケーションがとれている	4
③あまりコミュニケーションがとれていない	3
④コミュニケーションがとれていない	0
総計	7

Q3_2【効果的なコミュニケーション手段】MA ※担当プロジェクトを中心に回答 (n=7)

プロジェクトの実施段階において、プロジェクトを育むために効果的だと思うコミュニケーション手段や取組を3つ以内でお選びください。

プロジェクトを「育む」とは、プロジェクトとプログラムの問題意識およびコンセプトとの親和性の向上や方向性の調整、社会問題の解決に向けた協働や社会実装を重視した研究開発計画の具体化、改善等に取組むことです。

Q3_2【効果的なコミュニケーション手段】(3MA)	人
Q3_2_①サイトビジット	7
Q3_2_②総括面談	2
Q3_2_③プログラムサロン (ミニ合宿)	5
Q3_2_④SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREX セミナー・オープンフォーラム等)	0
Q3_2_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	4
Q3_2_⑥RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	0
Q3_2_⑦プロジェクト間連携の促進のための場作り	2
Q3_2_⑧POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	0
Q3_2_⑨プログラムによる情報発信 (POLICYDOOR、プログラム WEB 等)	0
Q3_2_⑩その他	0

Q3_3【ハンズオンマネジメントの効果】OA

プロジェクトの実施段階におけるプログラム活動 (プロジェクトとのコミュニケーションおよびハンズオンマネジメント) によって、プロジェクトにどのような影響や効果があったと思われますか。良い影響だけでなく、もし悪い影響もあればそれも含めて、できるだけ具体的にご記入ください。

プロジェクト間の横の連携に気づき、実際にほかのプロジェクトと連携したミーティングやシンポジウムを開催することができた。

<p>個別の分析を最終年度に統合的なモデルとしてまとめることを提案し、それが実施されて研究の目標達成度が高まった。</p>
<p>コロナ禍で調査研究を物理的に進めることができず進め方に迷っていた研究代表者に対して、期間延長などの手段のあることを提案し、研究の着実な実現に良い影響を与えることができた。研究グループだけでは探すことのできなかつた適切な協力研究者を紹介することができた。霞が関の近くで発表する機会を作り、政策立案者とのネットワークを作ることに寄与できた。</p> <p>社会実装とは何かについて議論する機会は、相互に貴重である。</p>
<p>サイトビジットなどで、実際の現場を見せていただくこと、研究代表以外の方たちと情報交換できることは、アドバイザーにとっては非常に貴重であり、そうした機会はできるだけ多い方がよいと思う。特にプロジェクトの初期段階での意見交換は、進むべき方向をしっかりと見定めるために重要である。また、プログラムサロンなど、担当アドバイザーに限らず、多くのアドバイザーやほかのプロジェクトの担当者たちと情報交流をすることは、プログラムの意味や位置づけなどを理解してもらう上で、大変に効果があると思う。</p>
<p>プロジェクトの活動についてその進捗状況や中間的成果等をお伺いするなかで、プロジェクト側が場合によってはあまり明確に認識していなかったような、本プログラムの目的に沿った活動や成果の見通し等について窺い知ることができる場合がある。そのような際には、あくまでも総括アドバイザーとしての見解であって、直接的にプロジェクトに対して助言するものではないという留保を行った上で、示唆を提供することがあり、これがプログラムの目的に沿ったプロジェクトの活動の方向性の修正や、途中段階でも一定の成果の導出につながることもある。</p>
<p>実際にサイトビジットを行なっているプロジェクトについては理解も深まりアドバイスもできる。もう少しプロジェクトのチームとの接点が増えると良いと思う。また活動内容を聞きこれについてアドバイスを行う形がメインであるが、例えば関連ありそうなこちらの活動を紹介し、議論するという形式があっても良い。</p>
<p>1, 2, 3 (サイトビジット、総括面談、プログラムサロン (ミニ合宿)) によって総括と担当 AD がプロジェクトの進捗を正確に把握できる。</p>

Q3_4【プロジェクト間連携の推進】 SA

プログラム内の他プロジェクトとの連携促進およびSciREX事業内の他のプロジェクトとの連携促進に関し、どの程度推進できていますか。該当するものを1つお選びください。

Q3_4【プロジェクト間連携の推進】(SA)	人
①推進できてい	0
②それなりに推進できている	5
③あまり推進できていない	2
④推進できていない	0
総計	7

Q3_5【プロジェクト間連携に影響を与えた活動】 MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=5)
プロジェクト間連携に影響の大きかったプログラム側の活動を3つ以内でお選びください。

Q3_5【プロジェクト間連携に影響を与えた活動】(3MA)	人
Q3_5_①サイトビジット	1
Q3_5_②総括面談	1
Q3_5_③プログラムサロン(ミニ合宿)	3
Q3_5_④SciREX事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREXセミナー・オープンフォーラム等)	0
Q3_5_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	0
Q3_5_⑥RISTEXのプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	1
Q3_5_⑦プロジェクト間連携の促進のための場作り	4
Q3_5_⑧POLICYDOOR制作のための取材・鼎談の実施	0
Q3_5_⑨プログラムによる情報発信(POLICYDOOR、プログラムWEB等)	3
Q3_5_⑩その他	0

Q3_6【実装に向けた取組への支援】 OA

プロジェクト成果の政策への実装に向けた取組に対して、プログラムからどのような支援を行いましたか。できるだけ具体的にご記入ください。

プログラムによる情報発信(POLICY DOOR、プログラムWEB等)
実際の政策担当部署や担当者などの紹介を行いました。
プロジェクトの成果について政策への実装(少なくとも“deployment”)が期待し得るようなものに対しては、事後評価における質疑応答等の中で、プロジェクト側に提案等を行ってきているものとする。また、POLICY DOORのようなプログラムによる情報発信は、必ずしも本プログラムの中で実施されたプロジェクトの成果だけには限定されないかもしれないが、プロジェクトを実施した研究代表者らが取り組んでいる活動について、実装にもつながり得るかもしれないように、広く関心を惹かせることには繋がっているものと窺われる。
総括面談、サイトビジットなどにおいて、「実装」という視点を常に持ち続けていただく重要性を繰り返し指摘させてもらった。また実際の政策担当者にプロジェクトに参加してもらったり、意見交換をしてもらったりする場づくりも行った。
調査研究の実施にあたり、日頃、研究者がコンタクトのない政策立案関係者を紹介し、インタビューに行ってもらった。政策立案者を含めたミニ発表会、研究協力者として政策立案者を紹介するなど、調査研究途上で行政関係者とのネットワークを作るようにした。
アドバイスの提供、関連ありそうな事例の紹介、その際の課題・遂行の経験等との比較、法制面、資金面等の情報提供。
あまりできていない。

項目 4. マネジメントグループ内でのコミュニケーション

Q4_1【マネジメント内のコミュニケーション】 SA

よりよいプログラムの成果創出と目標達成に向けて、プログラムマネジメントグループ（総括・アドバイザー・RISTEX）内でのコミュニケーションは十分にとれていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q4_1【マネジメント内のコミュニケーション】(SA)	人
①コミュニケーションがとれている	1
②それなりにコミュニケーションがとれている	5
③あまりコミュニケーションがとれていない	1
④コミュニケーションがとれていない	0
総計	7

Q4_2【効果的なコミュニケーション手段】 MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=6)

プログラムの成果創出と目標達成に向けた「プログラムマネジメントグループ内でのコミュニケーション」に、効果的であったと思う手段や取組を3つ以内でお選びください。

Q4_2【効果的なコミュニケーション手段】(3MA)	人
Q4_2_①プログラム会議	5
Q4_2_②プロジェクトの計画書や報告書のやり取り	1
Q4_2_③プロジェクトごとの進捗報告会や意見交換会	1
Q4_2_④サイトビジット	3
Q4_2_⑤総括面談	2
Q4_2_⑥プログラムサロン（ミニ合宿）	3
Q4_2_⑦SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム （SciREX セミナー・オープンフォーラム等）	0
Q4_2_⑧担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	1
Q4_2_⑨RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	0
Q4_2_⑩プロジェクト間連携の促進のための場作り	1
Q4_2_⑪POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	0
Q4_2_⑫プログラムによる情報発信（POLICYDOOR、プログラム WEB 等）	0
Q4_2_⑬その他	0

Q4_3【マネジメント内コミュニケーションの影響】OA

プログラムマネジメントグループ内でのコミュニケーションによって、どのような影響や効果がありましたか。良い影響だけでなく、もし悪い影響もあればそれも含めて、できるだけ具体的にご記入ください。

RISTEX 職員と合同でサイトビジットすることで、プロジェクトの現状や課題の情報共有ができた
プログラム内の他のプロジェクトの進捗や進め方を共有することにより、(よく進行しているプロジェクトを参照して) 自身のプロジェクトの改善につながった。
アドバイザーによって専門や立場、視点が異なり、様々な見方や意見があることによって、偏りの少ない適切な採択や評価が可能になっていると感じる。
プログラム会議, とりわけ, 採択のための選考(書面審査, 面接審査)や事後評価における議論を通じて, マネジメント・グループ内における多様な観点の共有とプログラムとしての首尾一貫した対応を実現することができているように窺われる。
行政的観点からも含めて自由に意見交換することにより、実装とは何かをイメージすることが容易になったのではないかと。調査研究の社会との観点を幅広く理解する一助となったのではないかと。
過去にチームが組めないプロジェクトもあった。役割分担がしっかりできていて、またメンバーの得意分野が多岐にわたっている方がプロジェクトとして面白いが、それをまとめるのが結構大変で、単なる報告に終わってしまう。そこから何を引き出すのかがチームとしての能力。ここはまだ課題が多い。
総括、AD 間での担当プロジェクトの進捗と問題点の共有

項目 5. 成果の創出、目標達成

Q5_1【成果創出・目標達成の見込み】 SA

プログラムとしての成果創出と目標達成の見込みはどの程度だと思いますか。プログラムの趣旨と問題意識などを踏まえ、該当するものを1つお選びください。

Q5_1【成果創出・目標達成の見込み】(SA)	人
①目標達成や狙いとした成果創出ができる	0
②それなりに目標達成や狙いとした成果創出ができる	5
③あまり目標達成や狙いとした成果創出ができない	2
④目標達成や狙いとした成果創出ができない	0
総計	7

Q5_2【プログラムのアウトカム】 OA

プログラム全体としてどのようなアウトカムが創出できた（できる）と思いますか。できるだけ具体的にお聞かせください。

「科学技術イノベーション政策のための科学」というプログラムの名称等でありながら、「政策のための科学」ではあっても、「科学技術イノベーション政策のための科学」に中核的に関わるような成果の創出には至っていないものと懸念される。これは、専ら、「科学技術イノベーション政策のための科学」に中核的に関わるような提案自体がきわめて少なく、また、提案があったとしても「科学技術イノベーション政策」を対象とするにはあまりにも専門性に乏しい（ナイーブである）ことに起因しているものと窺われる。
このプログラムの成果を受けて、(新型コロナ対策のような*) 政策の策定・実施にうまく繋がった事例が出てきた。*事務局補足
政策のための科学に対する政府職員および国民への意識の向上、政策のための科学に取り組む研究者数の拡大
新たなテーマへの挑戦で、スタートの当初はプロジェクト側にもマネジメント側にも試行錯誤や戸惑いがあったが、これまでの取り組みの積み上げにより、めざすべき姿や形が見えてきたように思う。
新型コロナ感染症の出現にあたり、〇〇教授がモデルやシミュレーションで活躍できたのは、このプログラムで支援したからではないか。近年、文科省では、省内で課題を募集し、それに対応した研究者とのコラボレーション研究が行われているが、そのようなことを行うきっかけとしては本プログラムの存在があるのではないか。
医療成果の可視化、レギュレーションについての現状分析、児童の貧困・暴力の背景等、それなりの成果は出ていると思う。
社会的インパクトのあるアウトカムを創出できたとは思わない。

Q5_3【インパクトの見込み】 OA

プログラムのアウトカムが、今後どのようなインパクトをもたらすことが期待されますか。これまでのプログラム活動等を踏まえて、インパクトの展望をお聞かせください。また、将来更なるインパクトをもたらすために、今後期待される取組があれば、誰がどのような取組をすることが望まれるかご記入ください。

研究開発推進政策、大学や研究開発法人のあり方などの科学技術イノベーションシステムの改革に関連したプロジェクトが今後増えることを期待しており、それによって科学技術イノベーションシステムの改革に資することを期待したい。
大きなアウトカムはすぐには出てこないと思われるが、ここで巣立った若い研究者がこれをステップして、結果として科学技術（政策）の進歩に寄与することは大いに送泥できるし、そうなることを期待している。
エビデンスベーストという考え方は、何をエビデンスとするかなど必ずしもやさしいものではないが、本プログラムの成果は、今後、EMBPを推進していく上で、必ず参考にされていくものと考えられる。将来のインパクトのためには、終了したプロジェクトについて定期的にフォローアップをし、必要に応じて RISTEX 側と意見交換をしたり、場合によっては、政策立案者との議論の場を設定するなどのサポートをするようなことも考えられるのではないか。
これまでに個々のプロジェクトが様々な成果を上げており、今後はそれらをつなぎ、発展させていくことが大変重要だと考える。RISTEX が中心となって、それらの継続と発展、橋渡しのための環境を整えていくことが期待される。
プログラムのアウトカムがインパクトを生み出すかどうかは、プログラムのマネジメント側によって連携支援や情報発信を行うことで実現できる部分もあるだろうが、まずは、プロジェクトが有効な成果を生み出していることが前提となり、さらに、プロジェクトの研究代表者等が本プログラムの下でのプロジェクト活動を終了した後であっても、継続して当該プロジェクトの成果等をさらに展開させるような積極的な活動をしていることに大きく拠っているように窺われる。
（新型コロナ対策*）の事例が一番良いインパクトだと思う。実際にはせっかく良い取り組みをしても、アウトカムがしっかり外に出て行かない、アウトリーチが弱いと感じている。また前述の様に面白いメンバーを集めておいても、それをしっかりまとめてプロジェクトとしての成果を打ち出すという点が弱いと感じている。 *事務局補足
上記の理由（社会的インパクトのあるアウトカムを創出できたとは思わない）から多くは期待できない。

Q5_4【課題の克服と成否要因】 OA

プログラムとしての成果創出、目標達成に向けて、課題や改善提案があればお聞かせください。

（今回のコロナ禍で難しい点があるかもしれませんが）、サイトビジットの頻度をもっと上げて、コミュニケーションを高めたほうが良いと思う。また、プログラム全体のイベント（合宿など）は、むしろ拡張すべきであり、横の連携をはなるように誘導したほうが良いと考えられる。それがプログラムとして実施する意味だと思う。
--

<p>マネジメント側、プロジェクト側、双方で十分に情報交換をすることは極めて重要である。異なるプロジェクトが互いについて知る合宿などの機会が減っていることは大変残念である。コロナの影響で難しい点もあるかもしれないが、そうした機会を増やしていただきたい。</p>
<p>当初行われていた泊まり込みの合宿は目に見えない効果を出していたので、財源があれば実施してほしい。終了課題の定期的なフォローアップと意見交換、もともとのアドバイザーなどによる助言。フォローアップをしないのであれば、事業効果は半減するような感じがする。</p>
<p>Society5.0等の科学技術イノベーション計画の目標を達成するための政策の研究、目標達成度の評価に関する研究などを推進する。</p>
<p>一つには、以前は見られた経済学系・経営学系・政策科学系等を基盤とした提案が最近ではほぼ見られなくなっており、これらの領域を専門とする研究者の関心を惹かなくなってしまうことは課題であるものと窺われる。この点については、今一度、本プログラムに関して潜在的に関心を有しているであろう研究者等についてリーチしていくことが重要であるように窺われる。もう一つは、これまでの経験から、プロジェクトにおける研究の成果がそのまま政策形成におけるエヴィデンスとなるようなかたちで実装に至ることはきわめて稀であり、むしろ、プロジェクトにおける研究の成果は、政策形成等におけるエヴィデンスを得るための新たな方法論を提供するとか、政策形成等のためのエヴィデンスを得るための新たなしくみを創出する（いわば、新たな“regulatory science”の領域の創出（及びその実施体制の構築））といったことが主たる成果となるのではないかと窺われるようになった。もしそのような認識が妥当であるとするれば、プログラムの目的の見直しや公募要領等のさらなる展開、そしてそれらを元にした潜在的に関心を有しているであろう研究者等へのリーチがなされるとよいのではないかと思われる。</p>
<p>アウトリーチの手法、政策実装へのプロセス等についてもっとプログラム側から情報なり機会を提供しても良いのでは？ プロジェクトの目標が打ち出せる様にチームをマネジメントする部分をプロジェクトリーダーにのみ任せるとは難しいと思うので、この点のサポートも必要（プロジェクトマネジメントの考え方、手法等のレクチャー（JST IMAPCT等ではこの様な講習を提供していた。ただしこれは高額なのでもっと簡便なものでも良い）</p>
<p>活動が限定された組織と関係者のものになっていて、Openで大きな広がりを持つ活動になっていない。</p>

Q5_5 【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】 SA

本プログラムは、SciREX 事業における関係機関との連携促進に関し、どの程度貢献できていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q5_5 【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】 (SA)	人
①貢献できている	0
②それなりに貢献できている	4
③あまり貢献できていない	3
④貢献できていない	0
総計	7

Q5_6【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】 SA

SciREX 事業の一環として新たな研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大に関し、どの程度貢献できていると思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q5_6【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】(SA)	人
1. 貢献できている	0
2. それなりに貢献できている	4
3. あまり貢献できていない	3
4. 貢献できていない	0
総計	7

Q5_7【SciREX 事業に貢献した活動】 MA (n=7)

SciREX 事業における関係機関との連携や、研究人材の発掘、人材ネットワークの拡大に影響の大きかったと思う活動を3つ以内でお選びください。

Q5_7【SciREX 事業に貢献した活動】(3MA)	人
Q5_7_①サイトビジット	0
Q5_7_②総括面談	0
Q5_7_③プログラムサロン (ミニ合宿)	4
Q5_7_④SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREX セミナー・オープンフォーラム等)	2
Q5_7_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	0
Q5_7_⑥RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	2
Q5_7_⑦文部科学省や SciREX 関係機関とのやり取り、コミュニケーション	2
Q5_7_⑧プロジェクト間連携 (SciREX 関係機関との連携を含む) の促進のための場作り	2
Q5_7_⑨POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	1
Q5_7_⑩SciREX クォーターリーにおける記事の作成	0
Q5_7_⑪プログラムによる情報発信 (POLICYDOOR、プログラム WEB 等)	2
Q5_7_⑫その他 (プロジェクトの公募・実施)	1

Q5_8【自身や周りの変化】MA (n=7)

アドバイザーとしてプログラムの活動に関わるようになったことで、ご自身や周りに何か変化がうまれましたか。該当するものを全てお選びください。特に変化がない場合には、「特に目立った変化はない」だけをお選びください。

Q5_8【自身や周りの変化】(3MA)	人
Q5_8_①ステークホルダー協働で行う研究開発の可能性を感じるようになった	2
Q5_8_②これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった	5
Q5_8_③自分が関心を持つ社会問題の見方が変わった	5
Q5_8_④自分の研究テーマの意義や内容が変わった	1
Q5_8_⑤自分の実務・実践の意義や内容が変わった	2
Q5_8_⑥新たな研究課題の設定・抽出ができた	0
Q5_8_⑦新たな実践・活動がうまれた	0
Q5_8_⑧研究者とのネットワークが広がった	4
Q5_8_⑨研究者以外の様々な人々とのネットワークが広がった	3
Q5_8_⑩その他 (※具体記述なし)	2
Q5_8_⑪特に目立った変化はない	0

項目 6. プログラムの効果

Q6_1【本プログラムならではの効果】 MA (n=7)

本プログラム以外のプログラムや資金制度では得られなかったもの、SciREX 事業や RISTEX ならではの固有の効果がありましたか。SciREX 事業ならではの、RISTEX ならではの、それぞれについて該当するものを全てお選びください。固有の効果がないと思われる場合は、「固有の効果は特になかった」だけをお選びください。

【SciREX 事業】

Q6_1【本プログラムならではの効果】(3MA)	人
Q6_1_SciREX_①本プログラムがなければ、今回の研究開発自体を行わなかった	3
Q6_1_SciREX_②本プログラムにより、研究開発が加速された	0
Q6_1_SciREX_③本プログラムでのプロジェクトでなければ研究内容に違いが生じていた	2
Q6_1_SciREX_④本プログラムがあることで、協働・連携体制が生じた、または深化した	1
Q6_1_SciREX_⑤別の資金制度では実現できなかった部分がある	2
Q6_1_SciREX_⑥本プログラムがあることで、研究開発成果の活用・波及が進んだ	1
Q6_1_SciREX_⑦本プログラムがあることで、学会やネットワーク構築、 人材輩出など、知的基盤や人的基盤に対する効果があった	3
Q6_1_SciREX_⑧その他 (SciREX については正しく状況を把握していない)	1
Q6_1_SciREX_⑨固有の効果は特になかった	0
無回答	1

【RISTEX】

Q6_1【本プログラムならではの効果】(3MA)	人
Q6_1_RISTEX_①本プログラムがなければ、今回の研究開発自体を行わなかった	1
Q6_1_RISTEX_②本プログラムにより、研究開発が加速された	4
Q6_1_RISTEX_③本プログラムでのプロジェクトでなければ研究内容に違いが生じていた	4
Q6_1_RISTEX_④本プログラムがあることで、協働・連携体制が生じた、または深化した	4
Q6_1_RISTEX_⑤別の資金制度では実現できなかった部分がある	3
Q6_1_RISTEX_⑥本プログラムがあることで、研究開発成果の活用・波及が進んだ	1
Q6_1_RISTEX_⑦本プログラムがあることで、学会やネットワーク構築、 人材輩出など、知的基盤や人的基盤に対する効果があった	3
Q6_1_RISTEX_⑧その他	0
Q6_1_RISTEX_⑨固有の効果は特になかった	0

Q6_2【本プログラムの固有効果の内容】 OA

本プログラムならではの効果について、その内容を具体的にお聞かせください。SciREX 事業ならではの、RISTEX ならではの、に分けてご記入ください。

【SciREX 事業】

「科学技術イノベーション政策のための科学」としてのプログラムが置かれていなければ、この領域において、とくにプロジェクト経費の規模から見て、実施されなかったかもしれないと思われるようなプロジェクトもあり、そのような研究を実施することができたという点で、一定の効果があつたものと窺われる。
政策担当者と研究者間の交流・ネットワークが拡大した
政策立案者とのコンタクトを作りながら活動するプログラムは他にない。大学での SciREX 事業と RISTEX 事業の接点を作ることで、具体的なネットワークを広げることができる。それにしては予算が少なすぎる。政策立案者が、今以上に議論に参画してくれば、より多くの効果が生まれるのではないか。
STI policy に関する研究に従事する研究者が増加したと推察する。

【RISTEX】

政策の分析・評価を目的とする研究が拡大した、政策のための科学に取り組む研究者数が拡大した
ハンズオンでプロジェクトを進めるという発想は RISTEX 以外にはない。ハンズオンはいやがられる面もあるかもしれないが、研究と社会との接点を増やすという観点からは成果をあげている。RISTEX も人事交替により、知識の継続が課題ではないか。
科学研究費助成事業のように「助成金」で実施されるのではなく、「委託費」として実施されることに伴い、プロジェクトに対してハンズオン・マネジメントを行い、プログラムの目的に沿ってプロジェクトの活動を実施してもらい、もってプログラムとして期待される成果の導出を図ってもらおうということについて、ある程度のプロジェクトに対してはこれが多かれ少なかれ実現できているものと窺われるが、これは（たとえば、JSPS ではなく）JST-RISTEX ならではのこそと考える。
若い研究者の場合、ほかの事業ではなかなか採択されにくいテーマも採っているので、研究の実現や加速につながっています。また、プログラム全体としてのミーティングやイベントを通じて、横の連携も図られたと評価しています。
新たなテーマとして、様々な研究のシーズを取り上げることができたのではないかと考える。新たな人材も育ちつつある。今後は、これらをさらに育て、点と線、面へと、広げていくことが重要である。
プロジェクト参加メンバーから本事業がなければこの様な形の協働ができなかったという声を何度も聞いている。
STI policy に関する研究に従事する研究者が増加したと推察する。

項目 7. ご意見・提案

Q7_1【制度についての改善提案】【アドバイザー制度の改善点・提案】 OA

アドバイザー制度の改善点や、プログラムやプロジェクトの期間および予算の規模・使い方などについて、ご意見や改善提案があればご記入ください。

【アドバイザー制度の改善点・提案】

アドバイザーとプロジェクトとの接点が少なく、プロジェクトの情報が得られないことから、4 半期毎に研究レポートの提出を義務付け、それに基づく情報共有の会合を持つ。
アドバイザー制度自体について特段の改善を要する点は見いだされないが、このプログラムの設計上、今一度、アドバイザーは、総括に対してのアドバイザーであって、プロジェクトに対して直接にアドバイスをする存在ではないことについて、プログラム・マネジメント・グループ内で認識を統一させるとともに、プロジェクトや潜在的提案者に対しても同様の理解を図ることが肝要であるものとする。これは、アドバイザーによってその専門性等が異なるとともに、プロジェクトの領域とアドバイザーが有する専門性等との関係からも来るものである（すなわち、アドバイザーが必ずしもプロジェクトの領域の専門家であるわけではなく、あくまでもプログラムとしての成果の導出といった局面でのプロジェクトに対する示唆の提供等に留まるからである）。
アドバイザー制度自体は肯定的に考えている。アドバイザー自身が当該研究をするわけではないので、研究の方向について直接的な影響はないようにした方がよいだろう。したがって複数、3 人程度のアドバイザーがつくことには賛成。担当プロジェクトを決める際には、アドバイザーの希望も聞いてもよいのではないか。
プロジェクトを客観的に見るアドバイザーという制度は、非常にユニークで、大変よいと思う。こうした制度をより有効活用するために、プロジェクト側との情報交換の機会を、タイミングよく設けていただくことが極めて重要であるとする。
もう少しプロジェクト・メンバーとのコミュニケーション機会を増やした方が適切なアドバイスができるのでは？
プロジェクト側とのやり取りの頻度を高める。サイトビジットの後で、AD 間の意見交換の場

【研究開発期間や予算に関する改善点・提案】

現在のプロジェクト方式では実施プロジェクト数が限られるので、科研費のように応募・実施できる研究方式（規模・期間に自由度、アドバイスなし）の制度（当初は 1 億円程度の予算）を設立する。
人文・社会科学系のアドバイザーをもっと増やしたほうが、社会実装面でより有効なアドバイスができると思います。
2 年で終了してもよいように思われる場合があるが、無理して 3 年間とすべきでもないのではないかと。2 年にしたり、4 年にしたり、活動を始めてからでも柔軟に対応してもよいのでは。予算は、本気で活動するためには少なすぎるように思われる。
3 年という短期間では達成が難しい課題も多く、それぞれ適切なゴールを設定しつつも、それで終わりではなく、さらに継続・発展させていくための環境を整えることが重要である。

第2期を実施する際には、第1期からプロジェクト当たりの予算規模が縮小され、その結果として、たとえば、プロジェクトにおける活動を中心的に実施するための研究員を雇用するような人件費を確保するような形では提案・実施されることが少なくなったという変化があった。しかし、これまでの第2期におけるプロジェクトの実施状況を見る限りにおいては、そのことが本プログラムの目的の実現を大きく損ねることには至っていないように思われ、むしろ、分散して実施されるような傾向も見られた（そして、研究代表者が必ずしも確実にマネジメントすることができるわけではないような）サブプロジェクトが減ったという点では、総じて本プログラムの目的に合致するようになったものと窺われる。その点では、研究開発予算については、とくに改善を要するようには見られない。一方、研究開発期間については、最終年度も年度いっぱい実施されることが前提とされているが、最終年度の事後評価はプロジェクトの実施状況を見る（エヴァリュエーション）だけに留まらず、その後の実装等に向けた展開に資する助言を提供するアセスメントの性格も有していることから、事後評価実施時点までには、当該プロジェクトの研究開発活動が実質的には完了しているような、研究開発期間の設定及び研究開発予算及びその執行に係るプログラムと各プロジェクトとの合意がなされることが好ましいのではないかと思われる。

現状の予算制約から考えると妥当かもしれないが、柔然の規模の方が望ましい。

期間の3年は現在のプロジェクト予算の規模では適切であるが、より大きな予算でより長期のプロジェクトもサポートすべき。

Q7_2 【ご意見・提案】 OA

SciREX 事業ならびに RISTEX や RISTEX のプログラムの運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば自由にご記入ください。プログラム総括や RISTEX のプログラム担当へのご意見・ご要望でも結構です。

【SciREX 事業】

SciREX 事業における他の取組とは補完的な関係となっているとはいえ、実態としては、かなりの「断絶」があるのではないかと窺われる。とくに、「科学技術イノベーション政策のための科学」に係る研究者を比較的擁しているような人材育成拠点の研究者による提案については制限されており（例、「SciREX 重点課題に基づく研究プロジェクト（共進化プロジェクト）」のプロジェクト代表者による応募については重複・集中等の是正措置として選考対象から除外されており、そのこと自体については妥当であると考えられるものの）、ほぼ応募がなされていない（応募がある場合も、当該人材育成拠点事業には関与していない研究者である）。しかし、拠点において育成されている人材の中には、将来的には、本プログラムにおいてプロジェクトを提案する者がいるかもしれないが、少なくとも現時点においては、本プログラムに応募してプロジェクトを提案してくるような傾向を窺うことができない。なお、SciREX 事業として「研究者レベル」での連携を進める上で、とくに、RISTEX による本プログラムにおけるプロジェクト実施者（又は、それよりも望ましいこととしては、採択に至る以前に潜在的提案者）が、SciREX 事業全体の取組について承知しておくことも重要であると思われ、そのための工夫がなされることが期待される。加えて、まだ、SciREX 事業全体として、「解かれることが望まれる“研究開発”課題」でかつ大学等に所属する研究者によってなされることが期待されるものについて、政策担当者側でも研究者側でもまだ良く共通しては持ち得ていないように窺われ、それらを見通していく作業も継続的に必要であるものと考えられる。また、そのような作業を通じる中で、RISTEX のこのプログラムのもとにおいて実施することが適切であるようなプロジェクト等があれば、積極的に提案を促していくということも考えられよう。

<p>科学技術イノベーション政策そのもののイノベーションのために、SciREX 事業は極めて重要であることを認識して、過去・現在の政策の有効性・効率性などを分析・評価する調査・研究を一層推進することを期待している。研究者と政策担当者が連携して実施する研究プロジェクト、政策側が研究テーマを提示して公募で研究を推進する研究の拡大が望まれる。</p>
<p>SciREX 事業自体も試行的事業であったので募集にあたっての考え方（例えば実装との関係についての考え方）が変化するのはおかしくないが、10 年を経て、事業自体の目的、効果を再検証することは、意味のあることだと思う。事業実施側ばかりでなく、政策立案者側が、どのように EBPM を取り入れようとしているのか、実際に何を取り入れたのかも、相互に議論するとよいのではないか。</p>
<p>参加大学を固定化せず、5 年ごとに一部を活動評価して入れ替える。</p>

【RISTEX】

<p>「政策のための科学」研究の拡大は極めて重要であることを認識して、プロジェクト方式は現行のままとし、それとは別に、科研費な応募・実施できる期間や金額に自由度の高い研究制度の設立が望まれる。</p>
<p>限られた予算や人員の中で、本当にしっかりと運営していらっしゃると思います。願わくば、(外部のリソースの活用も含めて) 予算や人員の増加を期待します。</p>
<p>POLICY DOOR はよいと思う。もっと本プログラムの成果を広報する余地があるのではないか。RISTEX 事業内のコラボレーションが見られるようになったので、更にその可能性を探ってほしいし、そのための予算もあるとよい。文理融合が叫ばれる中、RISTEX 事業の展開可能性は大きいのではないか。</p>
<p>少なくない提案者が RISTEX の他のプログラムにおいて採択され実施されたプロジェクトの後継として、本プログラムへの応募がなされているが、本プログラムの目的・趣旨についてはよく共有・理解される必要があると思われる。とりわけ、このプログラムは「...政策のための科学」を対象としながら、少なくない提案者が「政策」自体についてあまり承知していないことが窺われ、「政策」がどのようなものであるのか（必ずしも現実や実践上のことに限らず、ある程度理念的なものであっても良いが）についての理解を有している必要があるものと考えられる。また、潜在的提案者には応募以前にこの「政策」ということについて意識的に検討するようなことを求めてもよいかもしれない。加えて、最近では、JST 及び／又はその中の RISTEX のプログラムについて日頃から関心を有する者からの提案があるように窺えるが、「科学技術イノベーション政策のための科学」という対象に対応し得るような潜在的提案者にリーチし、また提案を促していくようなことが、さらに／引き続き求められるのではないかとと思われる。</p>
<p>日頃からの総括や事務局の皆さんの並々ならぬご尽力によって、プログラムが非常によく運営、進行されていると思います。今後も引き続き、どうぞよろしく願いいたします。</p>
<p>前述したが、アウトリーチ、政策等への実装のサポートをもっと強化したい。アウトリーチについては研究者向けのみではなく、それこそもっと噛み砕いて高校生や大学生、一般に対してのアウトリーチがあれば良い。</p>
<p>予算規模と採択数を増やす。</p>

科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム
プロジェクト実施者・アンケート結果（2020年度）

プログラム中間評価用資料

RISTEX

2020年11月13日

目次

アンケート概要	1
アンケート結果	2
項目 1. 所属プロジェクト	2
Q1_1【所属プロジェクト】SA	2
Q1_2【プロジェクトでの役割】SA	2
Q1_3【あなたの属性】SA	3
項目 2. プログラムを取り巻く外部環境	4
Q2_1【外部環境の変化の有無】SA	4
Q2_2【外部環境の変化の内容】OA ※前問回答が1の方が回答 (n=21)	4
項目 3. プログラムの活動の影響	7
Q3_1【提案・計画に対する影響の有無】SA	7
Q3_2【提案・計画に影響した活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=22)	7
Q3_3【プロジェクト実施に対する影響の有無】SA	8
Q3_4【プロジェクト実施に影響した活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=23)	8
Q3_5【プロジェクト間連携に対する影響の有無】SA	8
Q3_6【プロジェクト間連携に影響した活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=8)	9
Q3_7【プログラム活動の具体的影響や改善提案】OA	9
Q3_8【SciREX 事業関係機関との連携に対するプログラム活動の影響】SA	12
Q3_9【関係機関連携に影響を与えた活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=7)	13
Q3_10【実装に向けた取り組みへの支援】OA	13
項目 4. 成果の創出、目標達成	15
Q4_1【目標達成、成果創出の程度】SA	15
Q4_2【課題の克服と成否要因】OA	15
Q4_3【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】SA	17
Q4_4【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】SA	18
Q4_5【自身や周りの変化】MA (n=39)	18
項目 5. 研究成果の普及・展開	19
Q5_1【成果の担い手・受益者】OA	19
Q5_2【成果の担い手・受益者への働きかけ】SA	21
Q5_4【連携の課題と対応、成否要因】OA	23
項目 6. プログラムの効果	26
Q6_1【本プログラムならではの効果】MA (n=39)	26
Q6_2【本プログラムならではの効果の具体内容】OA	27
項目 7. ご意見・提案	29
Q7【ご意見・提案】OA	29

アンケート概要

本アンケートは、プログラムの中間評価に向けてプログラムが「活動報告書」を作成するための参考資料として、また、評価委員が評価を行う際の参考資料とするため、プログラムのステークホルダー（プログラムアドバイザーおよびプロジェクト実施者）からの情報を収集する目的で実施した。

本報告書は、プロジェクト実施者に対するアンケートの結果である。

◇ 目的

プログラム全体の運営状況などを把握するために実施。アンケート結果は、RISTEX におけるプログラム中間評価及び、SciREX の中間評価において利用する。

◇ 実施主体

RISTEX ※プログラム担当並びに運営評価委員会担当が協力して実施した。

◇ 対象者・有効回収

「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」プロジェクト実施者
(研究代表者及び実施者)

有効回収数 39

※協力依頼は、研究代表者全員に対して行い、研究実施者に対しては研究代表者経由で依頼した。

アンケートの内容が難解なため、依頼する研究代表者の選定は代表者に委ねた。このため依頼数は不明である。

◇ 実施時期

2020年10月 (22日(木) 〆切) ※11月13日(水) まで延長

◇ 質問項目

27問(単一選択12、複数選択6、自由記述9)

◇ 方法

アンケート用紙をメールに添付して依頼、回収

◇ アンケート情報の利用目的(依頼文の記載)

ご回答いただいたアンケートは、別途実施するアドバイザーへのアンケートの回答とともに、プログラム総括および運営評価委員会ならびに SciREX 事務局に提示し、「プログラムの中間評価」

「SciREX の中間評価」のための資料として活用いたします。また、プログラム運営の改善のために使用することがありますが、それ以外の目的での利用は行いません。個人やプロジェクトに対する評価を目的としたアンケートではありませんので、忌憚のないご意見をお聞かせください。

◇ 個人情報の扱い(依頼文の記載)

アンケートへのご回答は、個人が特定できない情報として取りまとめて利用いたします。また、中間評価の終了後には、評価報告書等とともに RISTEX の WEB サイトで公開する予定ですが、プライバシーに関わる情報が公開されることはありません。

アンケート結果

項目 1. 所属プロジェクト

Q1_1【所属プロジェクト】 SA

ご自身の所属プロジェクトを選択してください。複数のプロジェクトに所属している（した）方は、最も関与度の高いプロジェクトを1つお選びください。

Q1_1【所属プロジェクト】 SA	人	%
1. 貝戸プロジェクト	10	26%
2. 熊プロジェクト	3	8%
3. 小泉プロジェクト	1	3%
4. 高嶋プロジェクト	2	5%
5. 横野プロジェクト	1	3%
6. 阿部プロジェクト	3	8%
7. 伊藤プロジェクト	1	3%
8. 加藤プロジェクト	3	8%
9. 黒田プロジェクト	1	3%
10. 上道プロジェクト	3	8%
11. 加納プロジェクト	1	3%
12. 牧プロジェクト	6	15%
13. 横山プロジェクト	1	3%
14. 梶川プロジェクト	1	3%
15. 三成プロジェクト	1	3%
16. 八代プロジェクト	1	3%
総計	39	100%

Q1_2【プロジェクトでの役割】 SA

プロジェクトにおけるご自身の役割について、該当するものを1つお選びください。研究代表者の方でグループリーダーも努められている方は、「1」を選択してください。

Q1_2【プロジェクトでの役割】 SA	人	%
1. 代表者	15	38%
2. グループリーダー	8	21%
3. その他の実施者	16	41%
総計	39	100%

Q1_3【あなたの属性】 SA

ご自身の立場や属性について、該当するものを1つお選びください。

Q1_3【あなたの属性】 SA	人	%
1.人文学・社会科学の研究者	13	33%
2.自然科学の研究者	10	26%
3.NPO の職員	3	8%
4.企業の社員	4	10%
8.その他	9	23%
・ 大学院生	3	8%
・ 社会科学の大学院生	1	3%
・ 学部学生(リサーチアシスタント)	1	3%
・ 1 と 2 の境界領域を専門にしています	1	3%
・ 1、2 両方の立ち位置です	1	3%
(具体記述なし)	2	5%
総計	39	100%

項目 2. プログラムを取り巻く外部環境

Q2_1【外部環境の変化の有無】 SA

プロジェクトがはじまった当初と比較し、プログラムを取り巻く問題状況や社会情勢は変化していると思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q2_1【外部環境の変化の有無】 SA	人	%
1.大きな変化があった	25	64%
2.大きな変化はなかった	7	18%
3.判断できない	7	18%
総計	39	100%

注：「多少変化」と記述した回答者を「2」に分類。

Q2_2【外部環境の変化の内容】 OA ※前問回答が1の方が回答（n=21）

プログラムを取り巻く問題状況や社会情勢にどんな変化があったのか、具体的にご記入ください。

体罰の禁止に関する法律の制定およびそのキャンペーン。新型コロナウイルスによる生活の変化に伴うストレス上昇、子ども虐待やDV増加の懸念。
2014年にインフラ構造物に対する5年に一度の点検が義務化され、現在2期目に入っている。これと並行して、国土交通省などでは3期目に向けた議論が活発になされるようになってきており、本プログラムの実用化の舞台は整ってきたと考えています。
Covid19により、産業・商業・家庭の活動状況に変化が起きている。これが、一時的な変化か、今後もある程度定着継続するものかは、現時点では判然としない。
COVID-19による社会情勢の変化があった。
COVID-19の感染症対策にあたり、医療の連携連絡体制の不備、医療機能の未分化、医療政策の地域的な混乱が露呈した。これは長期的な観点で見れば、PJが社会課題として認識していた点であり、国民的な関心が高まった点で「追い風」と認識している。一方で短期的な観点で見れば、既存の医療機能で感染症対策に充てられる比重が高まり、また不要不急の受診の先送りに伴う医療機関の経営への打撃が見られた。病院にとって、将来的な病床再編は、直近の課題優先の中で棚上げになった。また病床再編を進めていた
国の政策も感染症対策物資確保や医療機関の経営支援に優先順位が変貌した。これはPJにとっては「大きな逆風」と認識している。また、PJはオンライン環境になじみのない自治体や病院を対象としており、一時期は（訪問の道が閉ざされたことで）連絡手段を失った。現在はオンライン会議を取り入れて回復を図っているが、現場からPJへの研究協力体制自体が「不要不急」（低い優先順位）に位置づけられないため、先方業務の負担にならないよう配慮することが増えた。具体的には連絡頻度や情報要求の程度を下げるなどで対応している
COVID-19の流行によって、外出の機会が減り、テレワークやZoomによる講義などが中心になった。
COVID-19を機に、「政策のためのエビデンス」についての社会的な認知、気運が少し高まったようにも感じる。（実際は表層的なもの、限定的なものという気がしなくもないが。）

<p>コロナウイルスの影響</p>
<p>コロナウイルスの影響により、対面しての調査や研修等がしづらい状況となった。発達障害等の対人支援においては、ICTを用いた遠隔サポートに取り組む支援者が増え、新たなサービス形態として認知されるようになった。科学技術の活用可能性もより拡大したと考えられる。</p>
<p>コロナ禍における科学の在り方、ポストコロナ時代の今後の科学の方向性が社会課題となっている。</p>
<p>まず、何よりも新型コロナウイルスの広がりには大きな影響をプロジェクトにも社会にも及ぼしていると考えます。患者参画という視点から見ても、患者や患者家族が医学や医療の現場と直接かかわって様々な活動を行うことが大変難しくなっています。一方で、次第にオンラインの手法に慣れた人が増えてくるにつれて、これまでとは異なる方法で専門家と患者・患者家族が直接の交流をする（オンラインで直接顔を見ながら会話する）ことが、ゆっくりとですが広まっていくのかもしれないと考えます。いずれにしても社会状況としては大きな変化と考えます。</p>
<p>医療のレギュレーションは、政策上の要請によって、変更を受けるが新型コロナ肺炎により、ダイナミックに許認可が動くことがあり、迅速審査や例外的扱いなどが起こり、社会情勢がレギュレーションに与える影響は大きかった。</p>
<p>自然災害の頻度が多くなり、一層のエネルギーシステムのレジリエンス強化の必要性が増した。</p>
<p>従事しているテーマの内容は、災害拠点病院のエネルギーレジリエンスの研究ですが、ここ数年、地震や台風による広域停電が頻発しており、被害のあった北海道や千葉県の災害拠点病院に情報収集に出向いた。病院での経験は災害シナリオの作成に役立っている。</p>
<p>新型コロナ・ウィルス感染拡大による労働問題、子どもの環境格差の拡大など</p>
<p>新型コロナウイルスの感染拡大を受け、子どもの貧困を巡る問題状況が悪化したと予想される。</p>
<p>新型コロナウイルス感染拡大の影響。</p>
<p>新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により教育研究活動に関する対応策への準備等に多くの時間を割いていたため、本プロジェクトが予定どおりに遂行できない状況ではありましたが、10月現在においては、現状に慣れてきたこともあり、成果発表も含め実施可能な状況になりつつあります。</p>
<p>新型コロナウイルス感染症拡大、という状況下で社会情勢に大きな変化があった。具体的には予定していた出張やインタビューができず、研究の根幹となるデータ収集に影響があった。</p>
<p>当方の研究分野においては、学術研究もさることながら、実践的研究が重要視されるようになってきた。また、実務的に有用な研究が基準類やマニュアルに反映される可能性が高まっていると考えています。</p>
<p>毎年、自然災害による停電やブラックアウトが発生し、取り組む研究プロジェクトの重要性が増したと考えられる。一方で、新型コロナウイルスの影響で病院に訪問して調査をすることが難しくなり、研究活動は停滞している。</p>
<p>本研究プロジェクトへの直接的な影響はないが、コロナウィルスのために海外業務が全てキャンセルになった。</p>
<p>ジェンダーに関するニュースやSNSでの話題が増えて、社会の意識の高まりを感じる。</p>
<p>研究していた事項が各省庁で取り上げられるようになった</p>

<p>人文・社会科学系領域への政策的な着目、科学技術基本法の改正、GDPR や個人情報保護を含めたデータ関連規制の変化</p>
<p>参考（Q2_1 で「多少変化」と記述した回答者）</p> <p>保護者支援プログラムや、離婚後の養育費取り立てなどに、自治体レベルで進展があったり、国会等で取り上げられたりなどの注目が集まった。また文理融合研究に期待が高まった。ただし何か具体的な実現した、大きな変化というほどとは言えないのではないかと。</p>
<p>参考（Q2_1 で「2」と記述した回答者）</p> <p>コロナウィルスの影響により活動が縮小されるかと思いましたが、必要なデータはほとんど入手済であったことと、プロジェクト間でメンバー同士の打ち合わせが遠隔で定期的に行えていることから、大きな変化はなかったと判断しました。</p>
<p>参考（Q2_1 で「2」と記述した回答者）</p> <p>研究を行う上ではコロナの影響は特に問題ないと考えています。</p>
<p>参考（Q2_1 で「2」と記述した回答者）</p> <p>業務や研究の性質上、大きな変化はなかったと感じています。</p>
<p>参考（Q2_1 で「3」と記述した回答者）</p> <p>本プロジェクトを遂行する上での問題はないが、日常業務を行う上では新型コロナウイルスの影響は大きかった。</p>

項目 3. プログラムの活動の影響

Q3_1【提案・計画に対する影響の有無】 SA

募集・選考段階および採択決定直後において、提案の着想、計画の作成、内容の改善にあたり、プログラム側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

Q3_1【提案・計画に対する影響の有無】 SA	人	%
1.影響を受けた	12	31%
2.それなりに影響を受けた	10	26%
3.あまり影響を受けなかった	11	28%
4.影響を受けなかった	6	15%
総計	39	100%

Q3_2【提案・計画に影響した活動】 3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=22)

提案・計画に影響の大きかったプログラム側の活動を3つ以内でお選びください。

Q3_2【提案・計画に影響した活動】 3MA	人	%
Q3_2_①募集要項の作り込み	6	27%
Q3_2_②募集説明会	0	0%
Q3_2_③プロジェクトによる提案書に対するコメント	13	59%
Q3_2_④総括面談	14	64%
Q3_2_⑤プログラムサロン (ミニ合宿)	2	9%
Q3_2_⑥SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREX セミナー・オープンフォーラム等)	0	0%
Q3_2_⑦担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	8	36%
Q3_2_⑧RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	2	9%
Q3_2_⑨プロジェクト間連携の促進のための場作り	3	14%
Q3_2_⑩POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	2	9%
Q3_2_⑪プログラムによる情報発信 (POLICYDOOR、プログラム WEB 等)	0	0%
Q3_2_⑫その他	0	0%

Q3_3【プロジェクト実施に対する影響の有無】 SA

プロジェクトを実施していく過程で、プログラム側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

Q3_3【プロジェクト実施に対する影響の有無】 SA	人	%
1.影響を受けた	5	13%
2.それなりに影響を受けた	18	46%
3.あまり影響を受けなかった	13	33%
4.影響を受けなかった	3	8%
総計	39	100%

Q3_4【プロジェクト実施に影響した活動】 3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=23)

プロジェクト実施に影響の大きかったプログラム側の活動を3つ以内でお選びください。

Q3_4【プロジェクト実施に影響した活動】 3MA	人	%
Q3_4_①サイトビジット	10	43%
Q3_4_②総括面談	11	48%
Q3_4_③プログラムサロン (ミニ合宿)	1	4%
Q3_4_④SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム (SciREX セミナー・オープンフォーラム等)	3	13%
Q3_4_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	12	52%
Q3_4_⑥RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	4	17%
Q3_4_⑦プロジェクト間連携の促進のための場作り	7	30%
Q3_4_⑧POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	1	4%
Q3_4_⑨プログラムによる情報発信 (POLICYDOOR、プログラム WEB 等)	2	9%
Q3_4_⑩その他	2	9%
・ 貝戸先生からプログラム側からのアドバイス等を伝えられていました	10	43%
・ 研究代表者の貝戸先生を通してプログラム側のご意見を頂戴しています.	11	48%

Q3_5【プロジェクト間連携に対する影響の有無】 SA

プログラム内の他プロジェクトとの連携促進およびSciREX 事業内の他のプロジェクトとの連携促進に関し、プログラム側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

Q3_5【プロジェクト間連携に対する影響の有無】 SA	人	%
1.影響を受けた	5	13%
2.それなりに影響を受けた	3	8%
3.あまり影響を受けなかった	20	51%
4.影響を受けなかった	11	28%
総計	39	100%

Q3_6【プロジェクト間連携に影響した活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答（n=8）
プロジェクト間連携に影響の大きかったプログラム側の活動を3つ以内でお選びください。

Q3_6【プロジェクト間連携に影響した活動】3MA	人	%
Q3_6_①サイトビジット	0	0%
Q3_6_②総括面談	0	0%
Q3_6_③プログラムサロン（ミニ合宿）	1	13%
Q3_6_④SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム （SciREX セミナー・オープンフォーラム等）	1	13%
Q3_6_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	0	0%
Q3_6_⑥RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	4	50%
Q3_6_⑦プロジェクト間連携の促進のための場作り	7	88%
Q3_6_⑧POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	0	0%
Q3_6_⑨プログラムによる情報発信（POLICYDOOR、プログラム WEB 等）	0	0%
Q3_6_⑩その他	0	0%

Q3_7【プログラム活動の具体的影響や改善提案】OA

プログラムの活動によってプロジェクトの何がどう変わったのか、「募集・選考段階やプロジェクト実施過程」と「プロジェクト連携」に分けて、できるだけ具体的にご記入ください。（良い影響だけでなく、もし悪い影響もあれば合わせてご記入ください）また、プログラムがプロジェクトに関与する活動に対して、改善提案があればご記入ください。

「募集・選考段階やプロジェクト実施過程に関わる効果」

(第 I 期中の)プログラムサロン等を通じて、他のプロジェクトの実施内容や成果を知ることや議論する機会が多く、その中で SciREX 事業や EBPM の在り方に疑問を感じるようになった。総括等との議論を通じて課題が明確となり、第 II 期でのプロジェクト提案に繋がった。
キックオフシンポジウムが、配信形式での開催となった。広報がオンラインで完結する、参加が手軽であるなどのメリットもあるが、慣れない配信形式のための業者選定や、予約してしまった会場の活用など困難もあった。
チーム編成の工夫、アウトリーチを組み込むこと、政策立案側と積極的にコンタクトするアクションが求められることにより、研究と現実解のブリッジを考えようとするなどなどがあげられる。
科研費等と異なり、このスキームでは、総括の先生、アドバイザーの先生方から、プロジェクト活動の改善のための非常に建設的なアドバイスを適宜いただいた。プロジェクトの外部の視点からのアドバイスは、プロジェクト内部のメンバーでは気づかないような論点も指摘していただき、プロジェクトの改善に役立っている。
回答者は学生アルバイトのため、プロジェクト運営に関する事柄は認知していません。
採択前の審査会におけるコメントにより、プログラムにおいて何が求められているのかをよく理解することができました。実施段階では、サイトビジットや総括面談により、有意義なアドバイスをいただくことができました。

自治体における子どもの貧困対策のあり方から、自治体がつ子ども貧困に関わるデータの二次利用体制の構築へと主な関心が変わった。
実施項目が増えた。研究期間、研究費の規模を考えると、難しい面もある。
出口としての政策課題が明確になった。
書類選考段階でいただいたコメントや最終面接により、研究計画に追加を行った。
少子化政策についてもっと取り組むように、と当初要望があり、研究Cを拡充したが、領域アドバイザーにもいろいろな考えの方がいらっしゃり、実際にはあまりそこはやらなくてもよいというようなお考えもいただいた。子どもは素人なので、あまり自信のない領域でもあり、できれば後の考え方を取り入れさせていただければと考えている。
政策の中身（子どもの貧困）中心に研究が捉えがちであったが、自治体データをどのようにオープンデータ化するのかといった政策・方法論に重点がシフトした。
政策実装を中心とする「研究成果のアウトプット」に意識が向くようになり、どのように研究成果を政策に実装するか、政策形成に反映させるとかという点がまだまだ不十分であったと認識できた。また、そのための具体的な方法、ヒントなど、多くの示唆を得た。
選考段階において、本プログラムでは、「政策に対する学術的な妥当性（科学的知見）」と「政策の実践や不急の実現性（社会実装）」が両輪にあることが明確に理解することができた。そのため、自身PJにおいても、上記2点について、分担者との検討を深めることができ、知見や実装の蓄積に向けた計画・課題を事前に整理することができた。
大きな変化はありませんでした。
統括面談等では、幅広い視野から助言を頂くことができ、大変勉強になった。初年度はコロナであまり事業が効果的にすすめられなかったが、資金の件など柔軟に対応して頂けた。
募集・選考段階では、プログラム内でのプロジェクトの位置付けや報告性が不明確でしたが、実際にプロジェクトを実施して、担当アドバイザーからのコメント等により、それらが明確になりました。
本テーマは類似のものはなく、募集・選考段階や実施過程で、影響は受けていない。
総括やアドバイザーについては、自分が進めるプロジェクトについて、プロジェクト外からでありながら、領域内ということで親身になって意見を言っていたら感じます。特に総括面談では、プロジェクトの様々な内容について、具体的に意見を言ってもらった、実施に対して有益な意見として受けとめました。また、東京霞ヶ関で行われたSciREXセミナーでの聴衆や統括との意見交換ができたことは、大変有意義でした。残念なのは、以前は毎年開催されていた領域内の合宿がなくなっていることです。かつて、あるPJの分担者として何度か合宿に参加しましたが、そこで多くの人的ネットワークを作ることができました。
研究代表者から指示された研究内容を研究代表者と相談しながら進めており、プログラム活動から直接的に影響を受けるまでには至ってないと感じています。もちろん、研究代表者を通して、間接的には影響を受けているとは認識しております
研究代表者より、申請前と採択後におけるプログラムの変化や、プログラム側からのコメントなどの情報は提供されていますが、私の担当箇所においては特に大きな変化はございません。
総括、ADからのコメントが推進の方向性を見極める際に大変に役立った。頻繁ではあるがこのペースがよかった。

<p>現段階では把握しておりません。</p>
<p>選考（面談）の際に、代表者に加えて主たる分担者が参加することは、採択後に、プロジェクトを推進する上で有用であった（方向性や意義、雰囲気の共有）。</p>

「プロジェクト連携に関わる効果」

<p>虐待と貧困の関連について、脳科学など自然科学的な研究と連携をしたことで、問題の社会科学的な基盤が明確になり、研究内容並びに政策提言の説得力が増した。同じく自治体データを利用した研究を行うプロジェクトとの連携によって、これまで中央政府がリードしてきた EBPM について、自治体においても展開する意義がより明確にすることができた。</p>
<p>コロナの影響もあり、プロジェクト連携の希望がだせなかったので、次年度機会があれば出してみたいと思っている。</p>
<p>プロジェクト連携は、これまで自身の PJ にはなかった貴重なリソース・機会であると認識している。採択された PJ 同士の「横の対話」の機会は非常に貴重であり、また「共創」の機会を頂け感謝している。「横の対話」は科学的知見や社会実装に関する苦労話、研究計画執行に関するアドバイスを頂く機会となっている。また「共創」として、合同ヒアリング、合同研究会、合同シンポジウムが実施（予定含む）できており、まさに双方の強みを持ち寄れる機会となっている。</p>
<p>プロジェクト連携はなかなかテーマが擦りあうことは少ないので、効果は限定的であるが、活動を設定する中で、別の発見も生まれることがある。当方では希少疾患はターゲットとしていなかったが、希少疾患のグラントを検索する過程で、当方の方法論もブラッシュアップされた側面がある。方法論の新たなユーザを獲得したことにより、洗練される部分がでてくる。</p>
<p>プロジェクト連携は思いのほかかみ合っており、好評をいただいたと思っている。こうした文理融合の方向性をもっと進めていきたい。</p>
<p>PJ 連携によって、災害医療に関わる政策実務者や企業実務者にインタビュー調査を行うことができた。また、異なる分野の研究者と情報交換を行うことで、研究活動に直接的な影響はあまりないが、私自身の視野が広がった。</p>
<p>プロジェクト連携が可能となり、具体的にシンポジウムを共催するなどして異なる分野の研究者との連携、協働が可能となった。</p>
<p>回答者は学生アルバイトのため、プロジェクト運営に関する事柄は認知していません。</p>
<p>具体的な連携先を提案してもらった。その提案に基づき、実際にプロジェクト間連携を行うことができ、プロジェクトの成果を強化することに繋がった。このプロジェクト間連携は、提案がなければ恐らく連携できなかったものであったが、大変貴重な経験となった。</p>
<p>研究テーマが Ristex に採択され、研究活動がそのプロジェクトのもとでなされていることに安心感から、公的機関の管理者からの協力が得られやすくなりました。</p>
<p>自分たちの PJ で手法としてやや弱いと思っていた部分について、プロジェクト連携で自分たちが持たない手法で研究を進めておられる専門家の方と組むことができ、展望が開けたと感じています。また、連携活動の提案と進め方についても比較的緩やかな内容で承認していただいたおかげで、実際に連携を進めながら具体的な研究内容を詰めていくことができていると感じています。</p>

本テーマに関しては、「病床の減床と都市空間の再編による健康イノベーション」プロジェクトと情報交換を行ったが、対象が病院という点は共通していたが、エネルギーに関するテーマなので、新たな切り口を生める有益な連携にはなっていないとの印象を持っている。
連携によるシンポジウムなどのイベントが開催できた。他 PJ と連携することによって、これまでとは異なる聴衆にメッセージを発信できた。
本プロジェクト成果の実践の場であるインフラ管理者に EBPM の重要性を説明しやすくなりました。
連携先のプロジェクトの研究者の方々と、サイエンティストを対象とした調査研究を行うにあたってジェンダーの観点から留意しなくてはならないことなどに関して、議論をすることができ、有意義でした。
大きな変化はありませんでした。
特によく把握できておりません。
現段階では把握しておりません。
今回はあまりなかった。もともと連携を前提にしていなかったこと、忙しいので、連携に期待をしすぎていたと大変。
プロジェクト連携は共通の目的の下、信頼の確保される形で進めていく必要がある。

Q3_8 【SciREX 事業関係機関との連携に対するプログラム活動の影響】 SA

SciREX 事業における関係機関との連携促進に関し、プログラム側の活動等から何らかの影響を受けましたか。該当するものを1つお選びください。

Q3_8 【SciREX 事業関係機関との連携に対するプログラム活動の影響】 SA	人	%
1.影響を受けた	2	5%
2.それなりに影響を受けた	5	13%
3.あまり影響を受けなかった	13	33%
4.影響を受けなかった	19	49%
総計	39	100%

Q3_9【関係機関連携に影響を与えた活動】3MA ※前問回答が1か2の方が回答 (n=7)

関係機関連携に影響の大きかったプログラム側の活動を3つ以内でお選びください。

Q3_9【関係機関連携に影響を与えた活動】3MA	人	%
Q3_9_①サイトビジット	1	14%
Q3_9_②総括面談	1	14%
Q3_9_③プログラムサロン（ミニ合宿）	1	14%
Q3_9_④SciREX 事業で開催されるセミナー・シンポジウム （SciREX セミナー・オープンフォーラム等）	3	43%
Q3_9_⑤担当アドバイザーとのやり取り、コミュニケーション	2	29%
Q3_9_⑥RISTEX のプログラム担当との日常的なやり取り、コミュニケーション	0	0%
Q3_9_⑦プロジェクト間連携（SciREX 関係機関との連携を含む）の促進のための場作り	1	14%
Q3_9_⑨プログラムによる情報発信（POLICYDOOR、プログラム WEB 等）	1	14%
Q3_9_⑧POLICYDOOR 制作のための取材・鼎談の実施	0	0%
Q3_9_⑩その他（具体記述なし）	1	14%

Q3_10【実装に向けた取り組みへの支援】OA

プロジェクト成果の政策への実装に向けた取り組みに対して、プログラムからどのような支援がありましたか。できるだけ具体的にご記入ください。

<p>アドバイザーからは、研究課題に共感していただけたことが何より心強く印象に残っている。</p> <p>また、事務局からは、手続きの枝葉末節や当初計画との一致性にこだわらず、「のびのびと研究・実装に集中してほしい」というエールを当初よりいただき、「厳格・硬直」という事務局のイメージを良い意味で裏切られたように思う。</p>
<p>インタビュー調査の候補者をご提案いただいた。研究の最終年度のまとめ方や計画の変更について、相談に乗っていただいた。</p>
<p>コロナの影響もあり、サイトビジットやアドバイザー面談などの話が進んでおらず、プロジェクトに関する共有・相談の場があまりない。こちらからも積極的に連絡をするべきなのだが、なかなかそれが出来ていない。オンラインでもよいので、そういった機会をもうけられるとありがたいです。</p>
<p>サイトビジットによる意見交換会の実施。</p>
<p>サイトビジットや総括面談で、有意義なご示唆をいただくことができました。</p>
<p>データの公開などの提案</p>
<p>まだ、プログラムから具体的な支援を受けるに至っていません。</p>
<p>まだ、我々のプロジェクト自体がプロジェクトチーム内で完結している関係で、プログラムから具体的な支援を受ける段階に至っていません。</p>
<p>回答者は学生アルバイトのため、プロジェクト運営に関する事柄は認知していません。</p>
<p>具体的な政策実装の手法に関する示唆を得た。また、研究の実施段階でコミュニケーションを始めるべき政策立案者に関して、いくつかの具体的に提案してもらった。</p>

合宿の開催、調査活動にかかる経費の支援
子どもの貧困調査研究コンソーシアム立ち上げ時の広報に協力していただいた。
支援していただいたのかもしれませんが、何をしていただいたのか、よくわかりません。
私の方ではまだ正確には把握できていませんが、プロジェクトはまだ支援を受ける段階ではないかと思えます。
実装に関しては、アドバイスはいただいたが、とくにまだ、具体的な支援はいただけてはいないように思われる。
政策への実装については、プログラムからの支援は期待したほど得られていないというのが正直なところです。特に、現役の制作担当者との連携について、もう少し支援を得られるかと思っていましたが、本プログラムが文部科学省によるプログラムということで、厚生労働省と連携したい私たちのPJにとっては結局自分たちの人脈から関わってくれる政策担当者などを探しているところです。
政策への実装に向けた取り組みについては、まだ行っていませんが、総括や担当アドバイザーからは、今後、具体的な成果が得られた段階で、どのように実装するかについて議論し、より具体的な方向性を示すよう助言をいただいています。
総括の先生、アドバイザーの先生方から、政策への実装をスムーズに進めるために、プロジェクトのメンバーに省庁と連携のある研究者等を加えるようにアドバイスをいただいた。このアドバイスにより、プロジェクト開始当初から、省庁から大学に転じた研究者をプロジェクトメンバーに追加するにいった。これにより、プロジェクトと政策当局との連携が進むものと期待している。
当プロジェクトが実施しているワークショップに、政策立案側が出席している際に、当プロジェクトが政策実装に向けた活動を含んでいることを、プログラム側から説明して頂くことが、政策立案側に対して一定のオーソライズがかかる形となり、当プロジェクトの位置づけを明確にすることができたことは、援護射撃として極めて有難いことでした。
私の方では把握できていません。
把握しておりません。
私の方では正確には把握できていません。
把握しておりません。
プレスリリースの際に大変よく助けていただき助かった。
ゲノム編集・ゲノム合成に関する RISTEX 内での議論との接続。

項目 4. 成果の創出、目標達成

Q4_1【目標達成、成果創出の程度】 SA

プロジェクト目標の達成や、狙いとした成果の創出はどの程度できる（できた）と思われますか。該当するものを1つお選びください。

Q4_1【目標達成、成果創出の程度】 SA	人	%
1.目標達成や狙いとした成果創出ができる（できた）	15	38%
2.それなりに目標達成や狙いとした成果創出ができる（できた）	23	59%
3.あまり目標達成や狙いとした成果創出ができない（できなかった）	0	0%
4.目標達成や狙いとした成果創出ができない（できなかった）	0	0%
無回答	1	3%
総計	39	100%

Q4_2【課題の克服と成否要因】 OA

プロジェクト目標の達成や成果を創出する上で、どのような困難や課題がありましたか。それをどのように克服（または対応）したのか、成功や失敗の要因も含めて具体的にご記入ください。

<p>ステークホルダーとして、官公庁職員があげられていたが、2、3年での異動になるので、次の担当者に引き継がれず、提案や議論が進まない、立ち消えになるのがつらい。</p> <p>官公庁の職員側に、研究 PJ との連携のインセンティブがないのだと思う。</p>
<p>タイムマネジメント。研究時間をどう捻出するかが課題。私の場合は、基本的には、勤勉しかない。</p>
<p>プロジェクト自体が時機を得たテーマであったので、今のところ当初の想定よりはスムーズに研究活動が進行していると思います。</p>
<p>プロジェクト内では膨大なデータセットを作成して分析するプロセスが必要であったが、大学生アルバイトを効果的に採用・育成し、研究者を強力にバックアップする体制が出来た。代表・副代表のマネジメントと研究予算に拠る。</p>
<p>レギュレーションのための技術予測、ルール・オブ・ルールの採用、新たな境界組織設定の模索の3つのテーマについて、それぞれが政策立案サイドに働きかけており、一部は動き、一部は当プロジェクトで実施している状況にある。</p>
<p>課題 C で対少子化政策についてよりシステマティックな研究をするうえで共同研究をお願いしているが、そこがまだ十分に動いていない。お互いに忙しすぎ、手が回っていないのが現状である。</p>
<p>会議等やインタビューがコロナの影響で、現地視察が少なくなった。そのため、zoom等を用いてオンラインで対応している。</p>
<p>技術の追加開発と実装からの調査に関しては、いきなり最終目標としての形を描いて計画を進めようとしていたが、まずは最小限の開発から進めていき、現場の声を聴きながら実装と改善を繰り返し、開発を進めていく方が良いと感じた。</p>

<p>行政・政策立案者にプロジェクトに参画してもらうこと、そういったステークホルダーと協働することが難しいと感じた。複数の経路でアプローチしたが、現在のところいずれも有効であったとはいえない状況である。一方で、幾人かとは継続的なコミュニケーション、協働ができており、結局は人と人とのネットワークによるものだと感じている。</p>
<p>最終年度を迎えると同時にコロナ禍に陥り、思うような活動（データ収集）ができなくなった。</p>
<p>災害拠点病院の訪問先のアポとりに時間を要した。R I S T E Xの方からの紹介が有効でした。</p>
<p>自治体との連携、促進については、それなりに成果が出ている。難しかったのは、当学・当PJの枠組みを超えた他の大学との連携。また、4月からは、コロナの影響で、自治体と直接対面で話をすることができず（出張が不可能）、また、自治体も大学も職員がテレワークしており、すべての事務作業が遅れがちであることが問題であった。</p>
<p>自治体によってEBPMや統計の二次利用に関する理解にばらつきがあり、協力体制を構築するためにはかなりの労力を必要とした。また、そもそも統計の二次利用を許可する法的枠組みがないために、データの提供を実現できなかった自治体もある（統計法上、政令指定都市によるデータ提供は条例に基づく必要あり）。さらに、分析結果を行政側に返しても、その結果を読み解いたり、そこから政策を立案していく体制が先方ないことも多い。より直接的な政策提言を行いたいが、必ずしも政策立案や政策評価を目的としてない調査のデータでは限界もある。自治体側のニーズを丁寧に聞き取った上で、分析を行うとともに、分析結果をフィードバックする際は、紙で報告するだけでなく、口頭で説明する機会をなるべく設けるようにした。</p>
<p>新しくする作業などどのように進めていくべきかを考えるうえで困難を感じた。わかるところから取り組みつつ、相談しながら行った。</p>
<p>前問で2にするか3にするかは非常に迷うところではあったが、「できない」と予想してしまった時点で本当にできなくなるようにも思い避けた。また、研究代表者としての「楽観」（前向き思考）がPJ全体の雰囲気にも関わると思い、2を選択した。</p> <p>成功かどうかは、研究PJの調整の余地を越えた、外的な要因に帰する部分が実は大きい。</p> <p>たとえば、担当者が腹をくくって病床再編を進めている状況（議決・予算など外堀も固まっている状況）では進む。一方で「逃げ場」がある状態では、「一旦休止（保留）」となっている。また基礎自治体との連携は、首長（との関係性）でも変わる。選挙で首長が退陣という場合には、自治体の政策軸も大きく変わる。当PJの研究は「現場環境に支えられて」初めて成り立つものであるため、その意味でも環境依存性が高い。</p>
<p>対象とするケースは様々で一般的な結論が得られにくい。ターゲットを絞ることで対応した。</p>
<p>本プロジェクトでは、活動の一部としてアンケート調査を実施する。Covid19により、産業・商業・家庭の活動状況に変化が起きている現状で、その影響を考慮しつつ、アンケート調査の項目の工夫が必要であり検討中である。</p>
<p>目標とする政策課題の明確化。これについて、領域アドバイザーのご意見がとても役に立ちました。</p>
<p>有償または無償で公開されているデータベースが不完全であった。例えば、論文DBにおいて研究者IDが存在しなかったり、あったとしても完備でなかったために、作業の遅れ、分析精度の低下を招いた。対応として、ある程度の不完全さを許したまま分析を行った。また一部の分析では独自に個体識別を行って分析をした。</p>

論文データを扱う上で、研究者名の名寄せが困難でしたが、レアな氏名に絞る、研究者数を限定して履歴まで調べるなど、研究課題ごとに手法を工夫して進めました。
患者参画ということで、多様な患者の方々に関わってもらいたいと努力を続けてきましたが、ある時は医療の専門家を通して、ある時は世界希少疾患の日 (RDD) などのイベントなどでといった具合に、多様な方法で活用できそうなものは利用して、とにかく行動してみるということでネットワークを広げてきました。また、政策へのエビデンス形成という政策科学においても簡単でない分野に取り組むに当たっては、海外の同様の活動に関して、専任のリサーチアシスタントを雇用することで文献レベルの情報収集を行いました。その情報を分析することを通して、自分たちの考えを作ってきています。幸い、私たちの PJ には、多様な専門性を持ったメンバーが集まっていますので、個々のメンバーが持つ異なる能力を組み合わせることで、難しい課題に取り組むことができていると私は考えています。
Policy-basedevidencemaking&gathering から Evidenc-based(informed)policymaking への移行が課題。プロジェクトとしてのアウトカムは一定程度創出できたと自己評価しているが、アウトカムの実現にはまだまだ課題が多い。
解析プログラムを作成する上で多少の問題はありましたが、プロジェクト全体に影響を与えるような問題ではなかったと思います。
研究計画に記載した成果は順調に達成できていると思います。
データは入手済のものが多かったので、研究の進捗はほぼ予定通りであったと思います。今のところは特段の失敗もありません。
たまたま関連する審議会委員であり、その発言から政策につながったことは運がよかた。
応募当初のメンバーの選択を誤った点が後々まで影響してしまい、プロジェクト運営の責任者としてリカバーしきれなかったことが大きな反省点である。
若手研究者を含めた多様な研究者との密な連携（深い共同研究）が課題であった。それぞれの人柄や関心、専門性を深く理解するように努め、自身の研究領域の拡大と関係者間での人間関係の構築を図った。

Q4_3 【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】 SA

あなたの所属するプロジェクトは、SciREX 事業における関係機関との連携促進に関し、どの程度貢献できている（できた）と思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q4_3 【SciREX 事業における関係機関連携への貢献】 SA	人	%
1. 貢献できている（できた）	1	3%
2. それなりに貢献できている（できた）	13	33%
3. あまり貢献できていない（できなかった）	17	44%
4. 貢献できていない（できなかった）	6	15%
無回答	2	5%
総計	39	100%

Q4_4【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】 SA

あなたの所属するプロジェクトは、SciREX 事業の一環として新たな研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大に関し、どの程度貢献できている（できた）と思いますか。該当するものを1つお選びください。

Q4_4【研究人材の発掘や人材ネットワークの拡大への貢献】 SA	人	%
1. 貢献できている（できた）	5	13%
2. それなりに貢献できている（できた）	14	36%
3. あまり貢献できていない（できなかった）	10	26%
4. 貢献できていない（できなかった）	9	23%
無回答	1	3%
総計	39	100%

Q4_5【自身や周りの変化】 MA (n=39)

プロジェクトとしてプログラムの活動に関わるようになったことで、ご自身や周りに何か変化がうまれましたか。該当するものを全てお選びください。特に変化がない場合には、「特に目立った変化はない」だけをお選びください。

Q4_5【自身や周りの変化】 MA	人	%
Q4_5_①ステークホルダー協働で行う研究開発の可能性を感じるようになった	20	51%
Q4_5_②これまでとは異なる問題解決の可能性を感じるようになった	19	49%
Q4_5_③自分が関心を持つ社会問題の見方が変わった	15	38%
Q4_5_④自分の研究テーマの意義や内容が変わった	15	38%
Q4_5_⑤自分の実務・実践の意義や内容が変わった	14	36%
Q4_5_⑥新たな研究課題の設定・抽出ができた	18	46%
Q4_5_⑦新たな実践・活動がうまれた	10	26%
Q4_5_⑧研究者とのネットワークが広がった	20	51%
Q4_5_⑨研究者以外の様々な人々とのネットワークが広がった	19	49%
Q4_5_⑩その他	1	3%
Q4_5_⑪特に目立った変化はない	2	5%

項目 5. 研究成果の普及・展開

Q5_1【成果の担い手・受益者】 OA

成果の普及・展開に向けて、働きかけや情報発信を行うべき成果の担い手（成果を普及展開する人・組織）や、受益者（政府・自治体、各種団体等の利害関係者、市民等）として、どのような人々を想定していますか。具体的にご記入ください。

<p>研究テーマが国民生活に貢献するものであるため、成果の普及・展開に向けては公的機関（国土交通省や自治体）、あるいはインフラ管理者（高速道路会社）に情報発信をしていきたいと考えています。</p>
<p>「病院事業者」「基礎自治体」「(病院再編が行われている基礎自治体の) 市民」「(病院再編の事例に興味を持つ) メディア・研究者・県や自治体の実務家・一般の事業者」が受益者であると認識している。病院事業者や基礎自治体については、データ提供⇒それに対するフィードバックのサイクルが確立している。市民はその間接的な受益者であり、直接的な対話を進めている途上である。また、PJ が広報的に知られるようになり、問い合わせを受けることが増えた。これらの問い合わせに対し知見を提供しており、「受益者」とみなせると思う。</p>
<p>リサーチ・アシスタントとして取り組んできて、大学機関やそれに関わる政策を決める政府、さらに企業などに役立つ研究ができていると感じられる。</p>
<p>現在の状況におきましては、特に具体的なものはございませんが、成果の担い手は、「政府系の広報機関」、受益者は、「政府、事業者、国民」であると考えています。</p>
<p>個々の研究者、大学・研究機関、研究費配分機関など</p>
<p>個人的には、この結果を元に、科学者にスポットをあてた研究を進める研究者、起業を考えている人たちなどの参考になればよいと思っています。</p>
<p>行政、一般市民、研究者</p>
<p>行政の担当者、公的機関及び民間機関の経営者、支援の担い手、当事者の保護者 関連領域（教育など対人支援）の支援者など。</p>
<p>国、都道府県、市町村の職員。一般市民。研究者。</p>
<p>災害医療に携わる方（災害拠点病院など）、災害医療に関する政策実務に携わる方、非常用発電機メーカー、病院内の BCP 担当者</p>
<p>子ども家庭福祉にかかわる行政職や NPO など実践者の方、司法・矯正にかかわる行政職や法曹の方 親子関係になやみをもつ（持っていた）親や子、この問題に興味を持っているメディアの人</p>
<p>新たな医療技術の保有者を巡るステークホルダすべてが対象範囲である。これは境界組織に組み込むべき対象者の優先順位でもある。具体的には、新規技術の保有者・発明者、それを実用化しようとする企業、その技術を使って製品開発を行う企業、規制当局、ファンディングエージェンシー、医学界及び特定疾患の医師集団（糖尿病学会などの病気別の学会）、患者団体、患者個人、病院、保険会社などすべてが含まれてしまうが、マネジメント可能な範囲に絞られる。</p>
<p>成果に担い手：研究プロジェクトメンバー 受益者：自然科学者コミュニティ、文部科学省・経済産業省等の行政官、大学の産学連携部門・TLO、地方行政官、民間企業</p>

<p>成果の担い手（国や自治体のインフラ管理者） 受益者（国民，主に道路利用者）</p>
<p>成果の担い手は，インフラ管理者（国土交通省，都道府県，自治体など）であり，受益者は国民を想定しています。</p>
<p>成果の担い手は，大学や学会、受益者は、政府（文科省）とその外郭団体。</p>
<p>政策決定者、医療や心理の臨床家、司法の専門家、矯正施設職員、福祉関係者、学校、保育事業、一般市民</p>
<p>政策担当者のうち、エビデンスに基づいた政策立案・推進(EBPM)の必要性を感じている方、また、現在の EBPM に課題を感じている方。</p>
<p>政策当局である政府・自治体を主に想定している。</p>
<p>政府、自治体、大学</p>
<p>政府、自治体、病院設備関係者、設備設計会社</p>
<p>政府・自治体、研究費の資金配分機関（公的なもの以外にも民間のもの、海外のものも含めて）、民間企業（製薬企業など）、患者・患者グループ、研究者（医学研究を行う研究者のみではなく、当事者参画について研究を行う研究者なども含む）、専門職、NPO、市民など</p>
<p>政府などの霞が関行政、また、大学や研究機関の執行部</p>
<p>対象例として病院を扱ってきたので、まずは病院が適切と考えるが、考え方は自治体などに理解頂き、応用範囲を広げるのが良いと思う。</p>
<p>福祉業界の実践家、公認心理士、政府、市民</p>
<p>成果の担い手対人支援の実践家や機関、公認心理師、福祉や教育に関わる省庁や官僚、市民、自治体 受益者政府、自治体、保護者、当事者</p>
<p>政府機関、資金配分機関（AMED 他）、患者団体、患者グループ、地方自治体など。 さらに、製薬会社を含む企業も対象となると考えています。</p>
<p>道路管理者が担い手であり，国民や市民が受益者であると考えています。</p>
<p>成果の担い手はインフラ管理主体，受益者は市民を想定しております。</p>
<p>各社会基盤施設を管理する維持管理者が，成果を施設の持続的な供用を目的とした維持管理に活用し，利用者が受益することを想定しています。</p>
<p>各社会基盤施設を維持管理する事業者が，成果を今後の維持管理に活用することにより，各施設の利用者が受益することを想定しています。</p>
<p>成果の担い手はインフラ管理者であり，受益者は国民全体や道路利用者であると考えています。</p>
<p>成果の担い手：国，自治体，高速道路会社 受益者：国民全体</p>
<p>成果の担い手としてインフラ管理事業者，受益者としてインフラ利用者を想定しています。</p>
<p>中学生、高校生の女子生徒、親、中学高校の教員、社会全体 政策担当者</p>
<p>文科省、厚労省、経産省、AMED、PMDA、関係学会</p>
<p>行政の関連規制の担当者。離島振興の関係者。JST/RISTEX の担当者。</p>

Q5_2【成果の担い手・受益者への働きかけ】 SA

想定される成果の担い手や受益者に対し、プロジェクトから何かしらの働きかけやコミュニケーション等を行っていますか。該当するものを1つお選びください。

Q5_2【成果の担い手・受益者への働きかけ】 SA	人	%
1. 十分行っている	15	38%
2. 十分とは言えないが、何かしら行っている	17	44%
3. 今後行う予定である	3	8%
4. 行う予定はない	4	10%
総計	39	100%

Q5_3【働きかけの内容】 OA ※前問回答が1～3の方が回答 (n=28)

想定される成果の担い手や受益者に、どのような働きかけやコミュニケーションを行っていますか。あるいは行う予定ですか。その内容を具体的にご記入ください。

NISTEP の STI ホライズン誌での論考発表、霞が関の行政官との対話など
Q5_1 の回答内容を参照。なお、コミュニケーション手段としては、本年 3 月以降は対面を避けておこなっている。 (Q5_1 の回答：「病院事業者」「基礎自治体」「(病院再編が行われている基礎自治体の) 市民」「(病院再編の事例に興味を持つ) メディア・研究者・県や自治体の実務家・一般の事業者」が受益者であると認識している。病院事業者や基礎自治体については、データ提供→それに対するフィードバックのサイクルが確立している。市民はその間接的な受益者であり、直接的な対話を進めている途上である。また、PJ が広報的に知られるようになり、問い合わせを受けることが増えた。これらの問い合わせに対し知見を提供しており、「受益者」とみなせると思う。)
インタビュー調査やイベントの案内、シンポジウムやアニュアルレポートなどでの成果報告など。
ウェブサイトや SNS での情報公開、セミナーへの参加案内、メールマガジン
シンポジウムを実施予定、ICT 活用ハンドブックの作成と配布、政策への提言
シンポジウムを実施予定、政策への提言
データエシックスに関するセミナーやウェビナーの開催を検討している。
各種委員会を通して担い手に、講演会を通して受益者に働きかけを行っています。
学会などで積極的に働きかけを行っています。
研究会やセミナー等の実施。
研究成果として得られた知見を、対象者を特定してセミナーを実施することで、発信したい。
公開シンポジウム、プロジェクト HP、SNS での情報発信、新聞、テレビの取材協力、日本語総説の執筆
国内外での成果発表のみならず、プロジェクト内でワークショップを開催し、関係する各ステークホルダーを招聘することにより、成果について、また、どのように社会に還元するかについて議論する予定です。
自分は研究の発信を行う立場にはないので詳細は把握できていない。

政策提言、研究成果の公表（シンポジウム、論文等）、マスコミ取材
<p>当プロジェクトの3つのテーマである、「レギュラトリー・ホライズン・スキヤニング」、「ルール・オブ・ルール」、「新たな境界組織」の重要性については、2018年、2019年と2回にわたって、シンポジウム「先端医療におけるイノベーションとレギュレーションの共進化」において、日米医療規制当局のトップ経験者を招聘し、彼らを交えて政策的な必要性を訴えるイベントを開催してきた。</p> <p>また、2020年度においては、レギュラトリーサイエンス学会にてルール・オブ・ルールの必要性を実証した研究成果を発表した他、厚生省審査管理課など政策当局を交えたルール・オブ・ルールのセッションをDIA 日本年会 2020（薬事規制のためのシンポジウム、2020/11/10 実施）にて計画している。</p> <p>境界組織的な活動としては、新規技術の保有者に対して（具体的にはAMEDの臓器チッププロジェクトに対して）新たな利用ルールづくりのためのワークショップをその技術のためだけに開催を計画し当プロジェクトの活動自体が境界組織的活動を行う試み（実施は2021年1月）を計画している他、本邦においてはユニークな境界組織としてのバイオバンクの支援組織であるCIBERの活動を支援する試み（実施は2021年2月）を予定している。また、レギュラトリー・ホライズン・スキヤニングについては、PMDAで活動を開始したが、PMDAのグループとのワークショップ（2021年3月）にて、NISTEPの活動との協業も含めて、方法論の交換と人材育成の両面から、情報交換を実施する予定である。</p>
<p>省庁から大学に転じた研究者がプロジェクトメンバーに参加している。本研究者は、省庁とのパイプがあり、現在でも政策当局と意見交換を継続しており、政策当局のニーズの把握に努め、本プロジェクトの研究活動へフィードバックを行っている。</p>
<p>成果の公表（一般公開のシンポジウム・セミナー、ウェブサイトの公開、あるいは学会での発表など）、プロジェクトとしてのヒアリングや個人的なコミュニケーションなど</p>
<p>政府や自治体には、本プロジェクトの研究成果を報告して政策決定に寄与する。</p> <p>大学内で、本プロジェクトの研究成果を生かしたコミュニティを醸成する。</p>
<p>定期的に研究会を行ったり、研究成果である論文等の公示をサイトにて行い、定期的な情報が欲しい人には登録してもらうシステムも設けている。</p>
<p>内閣府担当部署との意見交換等。研究室の博士課程に在籍する行政官への(共同研究に近い)研究指導。</p>
<p>病院との情報交換を行っている。</p>
<p>病院の方などへのインタビュー調査、その際に本研究プロジェクトの活動紹介。</p>
<p>本研究プロジェクトに直接的に参加して頂いたり、他プロジェクトの会合などにおいても本プロジェクトの紹介や打ち合わせを行っています。</p>
<p>シンポジウムの開催（予定も含む）、各種の出版物（一般向け）、取材</p>
<p>政府機関の人々には直接、研究プロジェクトの話をする機会を設けようとしてきています。</p> <p>他の対象には、SciREXセミナーや、10月に開催した公開の国際シンポジウムを通して情報発信してきています。</p>

<p>Web ページ</p> <p>公開シンポジウムを行い、その情報をこれまでに作ってきたメーリングリストで周知 厚生労働省に1度お尋ねして説明 法務総合研究所や法務省成人矯正課関係と研究会など</p>
<p>親会社には、本プロジェクトに関わる研究成果の説明を行っている。</p>
<p>本研究プロジェクトの参加者に、インフラ管理者が多数含まれているので、日ごろからコミュニケーションが取れていると思います。</p>
<p>インフラ管理者との共同研究を複数行っていることから、そのような場も利用して、本プログラムの活動をアピールしています。</p>
<p>会社とは定期的な会合や、意見交換の場を持っており、その中で本プロジェクトの内容や成果の活用などの働きかけを行っている。</p>
<p>2019年に最初の論文プレスリリースを行った。すべてのステークホルダーに届く可能性があり、効率がよいと感じた。現在製作中のパンフレットは全国の中学校に配送可能か検討中である。</p> <p>また、教科書会社の取材を受け冊子に掲載されたり、京都の理科高校教員への講演会を Zoom で行うなど活発に活動を展開している。さらに東京書籍の高校理科の教科書に、本研究について執筆予定であり、この影響力は非常に大きいと期待をしている。</p>
<p>行政の審議会における委員などとしての活動。日本離島センターとの連携。</p> <p>RISTEX が開催するワークショップなどへの参画。</p>

Q5_4【連携の課題と対応、成否要因】OA

成果の担い手や受益者と連携する上で、どのような課題や困難がありましたか。それをどのように克服（または対応）したのか、成功や失敗の要因も含めて具体的にご記入ください。

<p>アドバイザー等との助けもあり順調に行えている</p>
<p>インタビュー調査やイベントの開催が、新型コロナウイルス感染拡大の影響で難しい場面もあったが、オンラインツールを活用することで実現した。</p>
<p>サイト等にレスポンスがある人には、情報交換の場である研究会などの案内ができるが、もっと広くにアナウンスする方法を模索中である。</p>
<p>テーマが比較的大きいため、成果の担い手や受益者が多数存在し、どのような連携により本プロジェクトを遂行することが効率的であるか多少不明な点があります。そのため、現時点では、担当アドバイザーから助言を頂き、各ステークホルダーに成果を公表することで、効率的な連携を模索することを考えています。</p>
<p>ネットワーキングが十分ではなく、アプローチしきれていないと感じる。特に、プロジェクトが関係する政府・行政機関や資金配分機関のキーパーソンとのつながりを作ることが難しいと感じている。</p>
<p>プロジェクトの2年目であり、現時点では特になし。</p>
<p>モデル事例を共につくれる自治体との連携をどのように進めていくか、市民を対象としたプロジェクトをどうすすめるか=様々な関係者に関心のある自治体を紹介していただく、公認心理師など対象をまずは限定する</p>

<p>一番の課題は、時間的制約。大学勤務研究者が、自治体との連携にフルコミットすることは、大学の授業や各種業務、また、常に高いレベルの研究アウトプット（論文執筆、学会発表）が求められている中での研究業務に影響せずに行うのは不可能に等しい。RISTEXのように社会への具体的還元を重視することが求められている中で、新しい研究費獲得のためには、学会における学術アウトプット重視（査読論文〇本）が求められており、研究者は正直に言って、もう限界の状態にある。</p> <p>その上に、今年は、教育面においても、コロナの対応を含め、従来とは抜本的に異なるやり方の授業が求められている。</p>
<p>回答者は成果の担い手や受益者と実際に連携する立場にない。</p>
<p>技術的な面となるが、エネルギーバランスを量的（kWh）なものと質的（kW）なものを統合して検討できるシミュレーションツールを構築する必要がある、その間をどう結ぶか、また実際の機器の過渡特性の把握が難しい。特に後半の過渡特性は商品性にも結び付くところであり、データの入手が困難となる。自前の装置での特性を元に推し測ることなどで対応した。</p>
<p>研究代表者はじめ、機械工学を専門とするメンバーを主として構成されているため、成果の担い手や受益者とのつながりがもともとなく、紹介をしてもらいながら進めた。しかし、信頼関係がなければなかなかインタビュー調査を受けてくださらないので、紹介のルートには気を遣った。</p>
<p>現場でのモデル事例を作り、当事者にどういう利益があったのかを提示できるよう検討中</p>
<p>行政の人は入れ替わりが激しいので、興味を持ってくれる人がその職を離れる前に迅速に行動しないと、無駄になる経験をした。次からは気を付けたい。</p>
<p>行政側担当者のリテラシー、問題意識の深さなどに濃淡があり、意義深い関係を築くことが難しいこともある。まずは首長がEBPMに積極的であったり、優秀な職員がいる自治体とのあいだで成功事例を積み上げ、他自治体へ横展開していった。</p>
<p>子ども虐待に関する思い込み（「虐待は連鎖する」など）が強く、科学的知見が浸透しない。メッセージを持続的に発信していく必要がある。</p>
<p>上記のようなセミナーに参加する方々以外にも広く普及させることが必要であり、今後の課題である。</p> <p>（上記のようなセミナー：研究成果として得られた知見を、対象者を特定してセミナーを実施することで、発信したい。）</p>
<p>成果の担い手間の連携や情報発信には支障はなかった。SNSでの情報発信は、拡散先が知り合い経由に止まり、受益者に対して広く情報を発信する部分では弱かったかもしれない。キーパーソンにピンポイントでアナウンスできれば良いが、個人情報の観点から難しいだろう。</p>
<p>相手方を探索する段階、相手方と方向性を共有する段階、双方のタスクを確認する段階、双方のタスクを実行する段階、それぞれに困難が伴う。各段階で20%くらいずつ目減りし、当初の想定20%が残るといふ歩留まりであると思う。なお、現時点ではこのような状況が成功か失敗かは判断ができない。「選別」されることによって、短期的には成果がないように見えても、長期的には成果として結実する可能性が否定できないためである。</p>
<p>政府関係者（たとえば厚生労働省）の担当の方やスタッフとの連携は、当初期待したほどうまく進んでいません。</p>

政策の社会実装のためには、社会情勢や政策ニーズだけでなく、政策研究や提案の受け手としての行政組織の担当官（主に課長）の交代時期、個人の業績、人事評価を含めて、担当部署の政策立案サイクルを勘案した上で持ち込む必要があり、JST・RISTEXは政策研究成果の社会実装を目指すのであれば、そのための仲介機能を部分的にでも担うという覚悟が求められている。大学の研究者が個人の裁量で関係部署に挑むのは無謀であり、該当部署の特定と該当部署の政策課題の優先順位、人事交代のタイミングまで含めて、周辺情報を把握しない限り、実装にまで至らないというのを「標準ライン」として想定しておくべきである。こうした「政策の受け手側のプロファイリング」作業についてはプロジェクト側も当然に実施すべきであり、他省庁への介入行為となるものの政策実装を求めるのであれば、タブーとするのではなく、RISTEX側も分担すべきと考える。文部科学省も自らの省内の事情を考えれば、「プロファイリングなき政策実装なし」というのは当然と考えるものと推定する。省庁での勤務経験があり自らも政策立案を担当したことのある大学研究者は、このあたりの事情を理解しているものの、政策実装をテーマとしたワークショップなどでもこの点については現役官僚への遠慮から発言を控えており、全体最適をあきらめて個人の最適化のみを追求するように行動する傾向があり、政策研究と政策立案のギャップを埋めるためのノウハウの開示は遅々として進んでいない。最初から担当部署との協業を前提とした申請でない限り、各プロジェクトの担当者は複数にまたがる担当部署の政策立案者との間での必要となるコミュニケーションを実現することに困難を抱えている。当プロジェクトでは、医療における既存の境界組織の構成員をメンバーに擁している関係から、上記の問題を一部解決できているが、残念ながら、政策立案サイクルにシンクロさせるレベルにまでは到達していない。

まずは説得力のある研究成果を出すこと。

ステークホルダの望んでいることを正確に理解すること。

特に、課題や困難はありません。

社会全体のイメージや雰囲気を変えていくには長い時間と労力が必要であると感じた。

政策のフレームをインプットしても、それぞれのオリジナルアイデアのような体裁にされてシニアのwet研究者へのヒアリングに使われているように感じている。政策課題が解決されるのはよいことだが、徒労感を感じなくはない。

特になし。共通の課題であれば、どのような相手でも連携しやすい。

項目 6. プログラムの効果

Q6_1【本プログラムならではの効果】 MA (n=39)

本プログラム以外のプログラムや資金制度では得られなかったもの、SciREX 事業や RISTEX ならではの固有の効果がありましたか。SciREX 事業ならではの、RISTEX ならではの、それぞれについて該当するものを全てお選びください。固有の効果がないと思われる場合は、「固有の効果は特になかった」だけをお選びください。

【SciREX】

Q6_1【本プログラムならではの効果】 MA	人	%
Q6_1_①本プログラムがなければ、今回の研究開発自体を行わなかった	5	13%
Q6_1_②本プログラムにより、研究開発が加速された	5	13%
Q6_1_③本プログラムでのプロジェクトでなければ研究内容に違いが生じていた	6	15%
Q6_1_④本プログラムがあることで、協働・連携体制が生じた、または深化した	8	21%
Q6_1_⑤別の資金制度では実現できなかった部分がある	4	10%
Q6_1_⑥本プログラムがあることで、研究開発成果の活用・波及が進んだ	5	13%
Q6_1_⑦本プログラムがあることで、学会やネットワーク構築、人材輩出など、知的基盤や人的基盤に対する効果があった	8	21%
Q6_1_⑧その他（具体記述なし）	2	5%
Q6_1_⑨固有の効果は特になかった	7	18%
無回答	14	36%

【RISTEX】

Q6_1【本プログラムならではの効果】 MA	人	%
Q6_1_①本プログラムがなければ、今回の研究開発自体を行わなかった	9	23%
Q6_1_②本プログラムにより、研究開発が加速された	17	44%
Q6_1_③本プログラムでのプロジェクトでなければ研究内容に違いが生じていた	11	28%
Q6_1_④本プログラムがあることで、協働・連携体制が生じた、または深化した	26	67%
Q6_1_⑤別の資金制度では実現できなかった部分がある	8	21%
Q6_1_⑥本プログラムがあることで、研究開発成果の活用・波及が進んだ	10	26%
Q6_1_⑦本プログラムがあることで、学会やネットワーク構築、人材輩出など、知的基盤や人的基盤に対する効果があった	9	23%
Q6_1_⑧その他（具体記述なし）	1	3%
Q6_1_⑨固有の効果は特になかった	5	13%
無回答	1	3%

Q6_2【本プログラムならではの効果の具体内容】 OA

本プログラムならではの効果について、その内容を具体的にお聞かせください。SciREX 事業ならではの、RISTEX ならではの分けてご記入ください。

【SciREX】

「政策のための」という色が強くなった。
SciREX ならではのということが、あまり実感できませんでした。まだその段階まで行ってないのかもしれない。
SciREX 事業が醸成してきた、研究者と政策立案者（政策担当者）とのネットワークによって、政策実装のための示唆を得たこと。
異分野の研究者との交流ができた。
一つの目的に集う研究者のコミュニティができてきていること。
回答者は学生アルバイトであり、社会科学研究者を取り巻く制度を知らないので回答できない。
政策に活かせる成果は何か、ということを常に考えながら研究プロジェクトを進めることができた。
政策科学を対象とするユニークな事業プログラムである。全体としてみると、プログラム運営側が積極的にハンズオン支援を行っており、各プロジェクトの適切な計画変更や成果の実装等への支援が行われていると感じる。
分野が異なる領域において、政策研究の関係者にどのような人たちがいるのかがわかるようになった。
様々な人関わることができ、新しい知見をえることができた。
政策のための科学を意識して研究を提案し、実施してきています。 人材育成拠点の活動や RISTEX のプログラム以外の活動も意識しています。
種々の公的研究費において、学際的研究かつ課題解決的な政策提言につながるような研究ができる原資はほとんど存在せず、支援をうけられたことは大変感謝している。
科学、政策、社会をつなぐ研究開発に意欲的に取り組むことができた。

【RISTEX】

RISTEX は「市場原理に任せていてはすすまない社会課題の解決」という理念、目標の点で非常に共感しています。このような事業が必要な分野であることは間違いないです。所属機関内でもこの問題意識を共有していきたいですし、機会があるごとにお話ししています。
これまで進めてきた「患者参画（当事者参画）」を、政策形成という文脈において行うということの着想を得たこと。
サイトビジットを通じて、担当アドバイザーと有意義なやり取りを行うことができ、研究の進展に役立った。
プログラム間連携
一つの目的に集う研究者のコミュニティができてきていること。
科研費等と異なり、このスキームでは、総括の先生、アドバイザーの先生方から、プロジェクト活動の改善のための非常に建設的なアドバイスを適宜いただいた。プロジェクトの外部の視点からのアド

バイスは、プロジェクト内部のメンバーでは気づかないような論点も指摘していただき、プロジェクトの改善に役立っている。
我々の研究成果を EBPM という形で実務に反映させる効果が期待できます。
回答者は学生アルバイトであり、社会科学研究者を取り巻く制度を知らないので回答できない。
学術研究ではなく、実用化研究、実装化研究に重点をおいた活動ができる点が有益であると考えます。
技術だけではなく、政策的な側面での意見を得られたこと。
研究開発を行う上で、明確な政策課題を目標とするなどの点。
研究開発成果の重視
研究成果の実用化、実装化に重点をおいていることが本プロジェクトを加速させる効果を発揮していると考えます。
研究成果の社会実装を意識しながら研究プロジェクトを進めることができた。
政策実装を目指す部分があることにより、現実から逃げられないというプレッシャーを参加する研究者にあたえること。
文理融合研究、社会実装を重視した研究計画が可能となった。
本プログラムがあることで周囲の理解が進み、関係機関との連携や協力体制が築け、研究が促進された。
本プログラム内でプロジェクトを実施したことにより、EBPM の国内外での位置付けや、政策を科学することと本研究の関係性が明らかになったことや、科学技術と政策の関係から本プロジェクトを考えることができたことが、本プログラムならではの効果であると考えています。
連携プロジェクトの促進など
様々な人関わることができ、新しい知見をえることができた。
これまでのプロジェクトの成果や課題について知ることで、政策のための科学という枠の中で研究することの難しさやノウハウについて学ぶことができていると感じています。 たとえば自治体や地域社会と連携されているプロジェクトについて知ることは、私たちが患者や患者関係者と連携する際の参考になっています。
工学分野等の狭い意味での科学技術に偏った投資がなされている日本において、RISTEX は、人文・社会科学や社会課題解決に軸足を置き、超学際研究(Trans-disciplinaryresearch)を推進・後押ししている稀有かつ極めて重要な事業であり、RISTEX がなければ成立しなかったプロジェクトがかなり多いと思われる。
実務への適用を意識した研究を行うモチベーションになっていると考えます。
大学との協力関係がより一層深まっていると感じています。
丁寧なADのフォローや総括面談はその時々状況をまとめていただくのに大変役立った。
種々の公的研究費において、学際的研究かつ課題解決的な政策提言につながるような研究ができる原資はほとんど存在せず、支援をうけられたことは大変感謝している。
科学、政策、社会をつなぐ研究開発に意欲的に取り組むことができた。

項目 7. ご意見・提案

Q7【ご意見・提案】 OA

SciREX 事業ならびに RISTEX や RISTEX のプログラムの運営改善に向けて、ご意見・ご要望があれば自由にご記入ください。プログラム総括・アドバイザーや RISTEX のプログラム担当へのご意見・ご要望でも結構です。

【SciREX】

SciREX 事業内の他のプロジェクトとの連携促進については、重要性を理解するが、他方で研究テーマも多様な中で実際問題は必ずしも容易でないと感じる。連携促進を過度に進めることになった場合には、正の効果だけでなく、連携を意識しすぎることによる負の影響もありえて、個々のプロジェクトの研究活動に影響を与える可能性もあるのではないかと感じる。

英語広報を充実させてください。今回、RISTEX 側には、プロジェクト ID をつけて頂きましたが、全体としての ID システムがあることが重要と思います。成果の公表とプロジェクト ID と英語での情報発信がリンクすることが重要です

研究者と行政官・政策担当者が交流できるネットワークができつつあることは非常に価値があると思います。一方で、行政・政策側の人材は文部科学省関係が多く、まだまだ他の省庁を巻き込めていないように感じました。既にできてきている SciREX 事業のネットワーク内のコミュニケーションで終わることなく、他の分野・省庁などの人材が気軽に参加、交流できるような企画があればより良いと思います。

実装責任者の人件費も計上できると法人としてなお有難い。

人材育成拠点の若い学生の皆さんに RISTEX の公募プログラムの内容を紹介して一緒に議論するような機会を設けていただけるとお互いに有益ではないかと思えます。

成果が政策立案に生かされる形でまとまるよう、素人ながら努力していきますので、アドバイス等よろしくお願いたします。

この度運営改善目的のアンケートとのことで、真摯なご対応に頭が下がります。ただ、僭越ではありますが、アンケートの対象は研究代表者だけでよいと思いました。理由は、分担者や協力者の意見を聴取なされたい目的が良くわからなかったため、また、分担者や協力者にとって回答が負担になってしまうためです。(代表者の認識と大きくずれない様にと) 結局同じような回答に収れんしてしまったり、「代表者が適宜取りまとめて書いてほしいのだが、、、」といった要望もあつたりしました。また、分担者や協力者は代表者とのつながりは有っても、SciREX の担当者との直接の接点が薄いため、設問の趣旨にかなう回答をすることは難しいと思えます

【RISTEX】

プログラム内の他プロジェクトとの連携促進については、重要性を理解するが、他方で研究テーマも多様な中で実際問題は必ずしも容易でないと感じる。連携促進を過度に進めることになった場合には、正の効果だけでなく、連携を意識しすぎることによる負の影響もありえて、個々のプロジェクトの研究活動に影響を与える可能性もあるのではないかと感じる。

RISTEX プログラム担当者には、サイトビジットにもお越しいただき、**EBPM** に関する専門的知見をもとに、様々なアドバイスをいただき、大変お世話になった。プログラム担当は日常的にコミュニケーションを取りやすく、そのような立場にアカデミックな背景も持つ方になっていただけると大変ありがたい。アドバイザーの先生方とは年に1回程度、コミュニケーションを取るだけになってしまっている。

SciREX へのコメントと同様で、アンケートの対象については、負担軽減をご検討いただきたいです。ただ、日頃のサポートや体制については、大変助かっており、また感謝しております。

アドバイザーとの面談や、具体的なアドバイスを教示いただき、感謝しております。

コロナで色々と情勢が変わり大変お忙しいと思いますが、柔軟な対応に感謝申し上げます。**Zoom** などの活用を行い、密に連携をとって進められるとありがたいです。

プロジェクト・アドバイザー制度は、正直なところあまり機能していない。アドバイザーの先生方もお忙しい中で、年に1回ほど（それほどもあっていない場合も）会うだけでは、プロジェクトへの具体的な関与は難しいと考える。どのようにしたらより建設的なかわりができるか、私としても模索中である。

プロジェクトに対していつもの確なアドバイスを頂いており、とても感謝しています。また、プロジェクト間連携はプロジェクトにとっても重要な成果に繋がったと同時に、研究者としてもまたとない貴重な経験ができました。今後は、プログラムサロンなど、他のプロジェクトや他の分野の研究者とも交流できる機会をもっと増やしてもらえたらと思います。

英語広報を充実させてください。プロジェクトサマリーの他、英語媒体での情報発信のページを増やしていくことが重要と思います。

実装責任者の人件費も計上できると法人としてなお有難い。

成果が政策立案に生かされる形でまとまるよう、素人ながら努力していきますので、アドバイス等よろしく願いいたします。

本プロジェクトから派生する形でいくつかの研究活動が立ち上がりつつあります。本プロジェクトとの連携可能性について相談させて頂きたいです。

今よりもさらに総括やアドバイザーと対話したいと考えていますが、研究プロジェクトそのものを動かすのに忙しくなりがちで、こちらから十分にお願いができてない状況です。
たとえばサイトビジットを定期的に義務化するなどの方策もあってもよいのではないかと（私たちとしてありがたい）と考えています。また領域合宿は是非復活させていただきたいと思います。
Zoom でもよいのではないのでしょうか。人と情報のエコシステムでは今年、そのような領域内ミーティングが開催され（私はあるプロジェクトの分担研究者）、大変勉強になりました。

研究代表者を経験した研究者のアドバイザーへの登用。